長崎県文化財調査報告書　第147集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ

1 9 9 8

長 崎 県 教 育 委 員 会

長崎県文化財調査報告書　第147集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ

・原山支石墓群（北有馬町）
・越高浜遺跡（上県町）
・狸山支石墓群周辺（佐々町）

1998

長崎県教育委員会

発刊にあたって

近年，全国的に埋蔵文化財への関心が高まっておりますが，本県でも昨年９月，壱岐・原の辻遺跡が国の史跡に指定され，県民のみならず全国的にその名が知られることになりました。原の辻遺跡のように『魏志倭人伝』に伝えられる弥生時代の「クニ」の王都が特定されたのは全国でも初めてのことであり，現在も将来の国特別史跡指定を念頭に発掘調査を進めております。

さて本県は，先の原の辻遺跡をはじめ多くの貴重な埋蔵文化財の宝庫であり，これらを保存・活用し，さらに学術的な調査によってその実態を解明していくことは，本県の文化財行政に課せられた大きな使命であります。

このような主旨のもとに長崎県教育委員会では，平成３年度から県内の重要遺跡について，その範囲や性格・時代などの内容解明のために，年度ごとに数か所の遺跡の発掘調査を実施してまいりました。平成８年度は朝鮮半島の新石器時代の土器が出土しました対馬・上県町越高浜遺跡をはじめ，南高来郡北有馬町原山支石墓群，北松浦郡佐々町狸山支石墓群の範囲確認調査を行い，さまざまな調査成果を得ることができました。この調査報告書が本県の埋蔵文化財についての理解と愛護を深め，学術，文化財保護のために広く活用されることを念願するものであります。

最後に，発掘調査の実施にあたりまして御理解と御協力をいただきました地元関係者ならびに教育委員会の方々に深く感謝申し上げます。

平成10年３月31日

長崎県教育委員会教育長

中　川　　忠

例　　言

1．本書は長崎県教育委員会が平成８年度から実施している県内主要遺跡内容確認調査の結果報告である。

2．本書には，平成８年度調査をおこなった原山支石墓群（南高来郡北有馬町），越高浜遺跡（上県郡上県町），狸山支石墓群周辺（北松浦郡佐々町）の結果報告を収録した。

3．本書では各遺跡について分担執筆した。それぞれの遺跡についての執筆者は，以下のとおりである。

原山支石墓群	古門雅高，小松　旭
越高浜遺跡	東　貴之，福田一志
狸山支石墓群周辺	村川逸朗，小松　旭

4．詳細は各項の例言を参照されたい。

5．本書の総括編集は古門がおこなった。

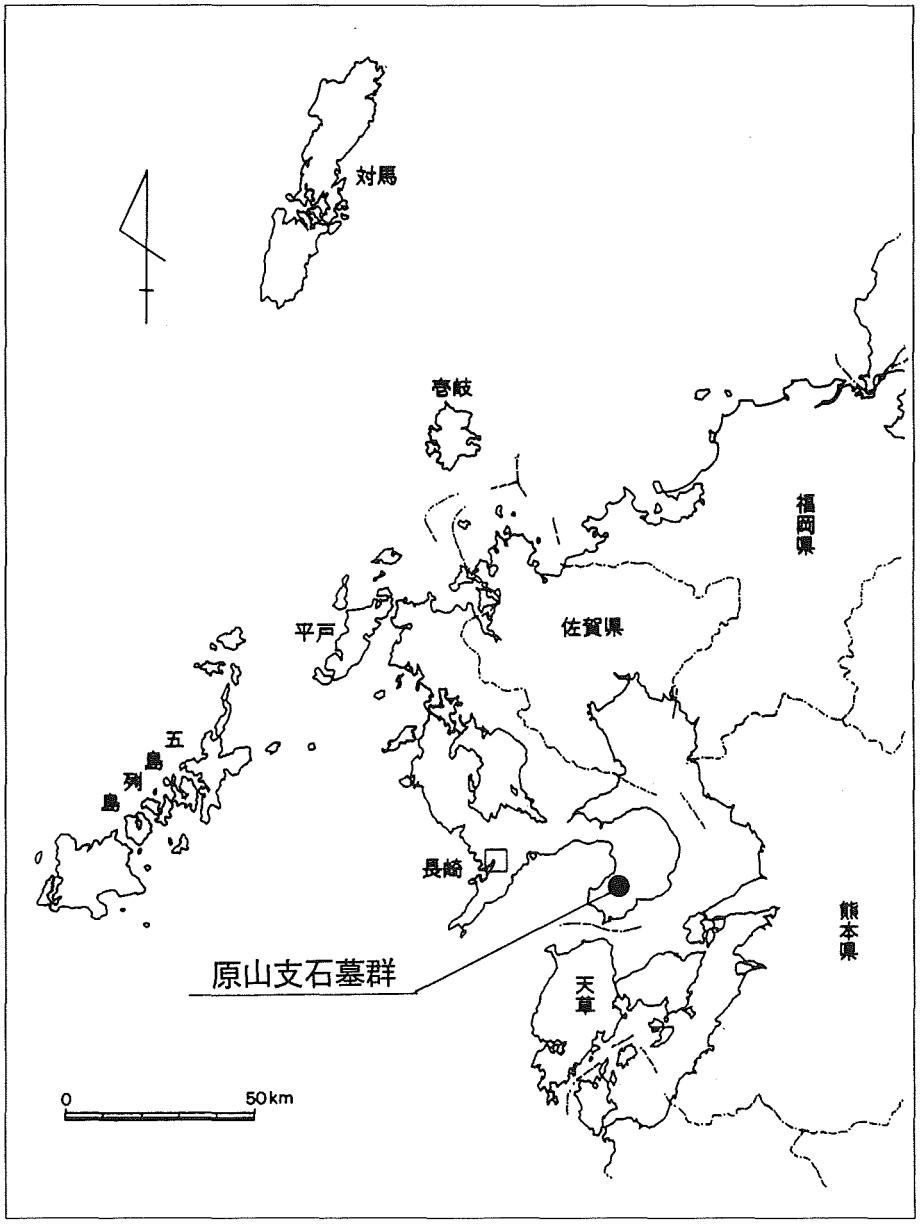
総　目　次

第１部　原山支石墓群 …… 1
南高来郡北有馬町所在
第Ⅰ章．遺跡の立地と環境 …… 4
第Ⅱ章．調査の経緯 …… 6
第Ⅲ章．主要遺跡内容確認調査の概要 …… 10

第２部　越高浜遺跡 …… 21
上県郡上県町所在
第Ⅰ章．遺跡の立地と環境 …… 25
第Ⅱ章．調査の経緯 …… 28
第Ⅲ章．主要遺跡内容確認調査の概要 …… 28
第Ⅳ章．総括 …… 44
第Ⅴ章．まとめ …… 46

第３部　狸山支石墓群周辺 …… 55
北松浦郡佐々町
第Ⅰ章．地理的歴史的環境 …… 58
第Ⅱ章．調査の経緯 …… 58
第Ⅲ章．主要遺跡内容確認調査の概要 …… 60
第Ⅳ章．まとめ

第Ⅰ部　原山支石墓群



例　　言

1．本報告書は南高来郡北有馬町坂上下名字原ノ尻川に所在する原山支石墓群の主要遺跡内容確認調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，北有馬町教育委員会の協力を得て，平成８年７月８日から８月９日，８月26日から８月30日にかけて実施した。

3．調査担当

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事　古門　雅高
同　　小松　　旭
文化財調査員　　荒木　伸也

4．調査協力

北有馬町教育委員会

教育長　城谷　東洋
社会教育係長　佐藤　光典（現社会教育課長）
社会教育係　木村　岳士

5．遺物の実測は渡邊康行・徳永妙子の協力をえた。

6．本書における遺物・写真・図面などは長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

7．本書の執筆は古門・小松がおこなった。編集は古門による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 6
第Ⅲ章　主要遺跡内容確認調査の概要 …… 10
　第１節　調査の目的と方法 …… 10
　第２節　調査の概要 …… 10
　第３節　遺　　構 …… 12
　第４節　出土遺物 …… 12

挿 図 目 次

第１図　原山支石墓群と周辺の遺跡位置図（S=1/37,500） …… 5
第２図　原山支石墓群位置図（S=1/13,500） …… 6
第３図　原山支石墓第３群の遺構（S=1/300） …… 7
第４図　原山支石墓第３群の過去の調査遺物（S=1/250） …… 8
第５図　調査区設定図（S=1/600） …… 10
第６図　Ｂトレンチの性格不明遺構（S=1/80） …… 13
第７図　原山支石墓群出土土器（S=1/3） …… 14
第８図　原山支石墓群出土石器（S=2/3） …… 15

図 版 目 次

図版１ …… 19
図版２ …… 20

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

北有馬町は，島原半島で最長の有馬川を町境として，南は南有馬町に接し，東は西有家町，西は小浜町・南串山町に接する。町域は北を頂点とした三角形状を呈し，面積26.59ｋ㎡，人口4,633人，世帯数は1,291世帯（平成10年３月現在）である。

年間の平均気温は16.69℃で，年間降水量は1965㎜であり，温暖多雨の気候といえる。町の主要産業は農業で，ミカン・メロン・水稲・馬鈴薯などがさかんに栽培されている。町内には，国の史跡が二つ存在する。本遺跡と有馬氏の居城として知られる日野江城跡である。日野江城跡については町教育委員会によって平成７年度から整備調査が進んでいる。

原山支石墓群は北有馬町の北西部に位置し，隣接する諏訪の池を介して近隣の小浜町や南串山町と接する場所にある。今回調査対象とした原山支石墓第３群は行政上，南高来郡北有馬町坂上下名字原ノ尻川にある。

遺跡は雲仙普賢岳の南麓，標高約250ｍの丘陵緩傾斜地に立地する（第１図）。周囲の丘陵は畑地や水田として利用されており，可耕地たりえるところは，くまなく開発されているといってよい。

第２節　歴史的環境[註1]

北有馬町に所在する遺跡としては，旧石器時代では論所原遺跡（図1-5）がある。雲仙南麓の標高440ｍほどのところに位置し，県文化課の分布調査によって台形石器が表採されている。縄文時代には割石原遺跡（図1-4）がある。標高290ｍの丘陵地に立地する遺跡で縄文土器片・磨製石斧・石鏃などが発見されている。

また有馬川の左岸に位置する標高10～30ｍの河岸段丘に今福遺跡（図1-7）がある。弥生時代～中・近世の複合遺跡で，弥生時代の遺構として，ドングリ貯蔵穴・土器溜まり・環濠・甕棺墓・土坑墓・竪穴住居跡などが検出されている。とくに石包丁が10点出土したことによって，有馬川の沖積地で水稲耕作が行われていたことが知れる。

古墳時代には箱式石棺を内部主体とする塚田古墳（図1-6）がある。今福遺跡と同じ河岸段丘上に立地し，石棺内からは鏡，勾玉，管玉，鉄剣が出土したという。

中世の今福遺跡も注目される。遺構としては，掘立柱建物跡・溝・井戸・円形竪穴・道路状遺構などが発見されており，遺物は輸入陶磁器を中心として多彩なものがある。

さらに本町では日野江城跡（図1-8）がある。南北朝期の築城とされる平山城で，標高70ｍほどの丘陵に立地する。中世有馬氏の居城で，本丸跡，二ノ丸跡，三ノ丸跡，竪堀跡，大手口，出丸などが残る。

［註］

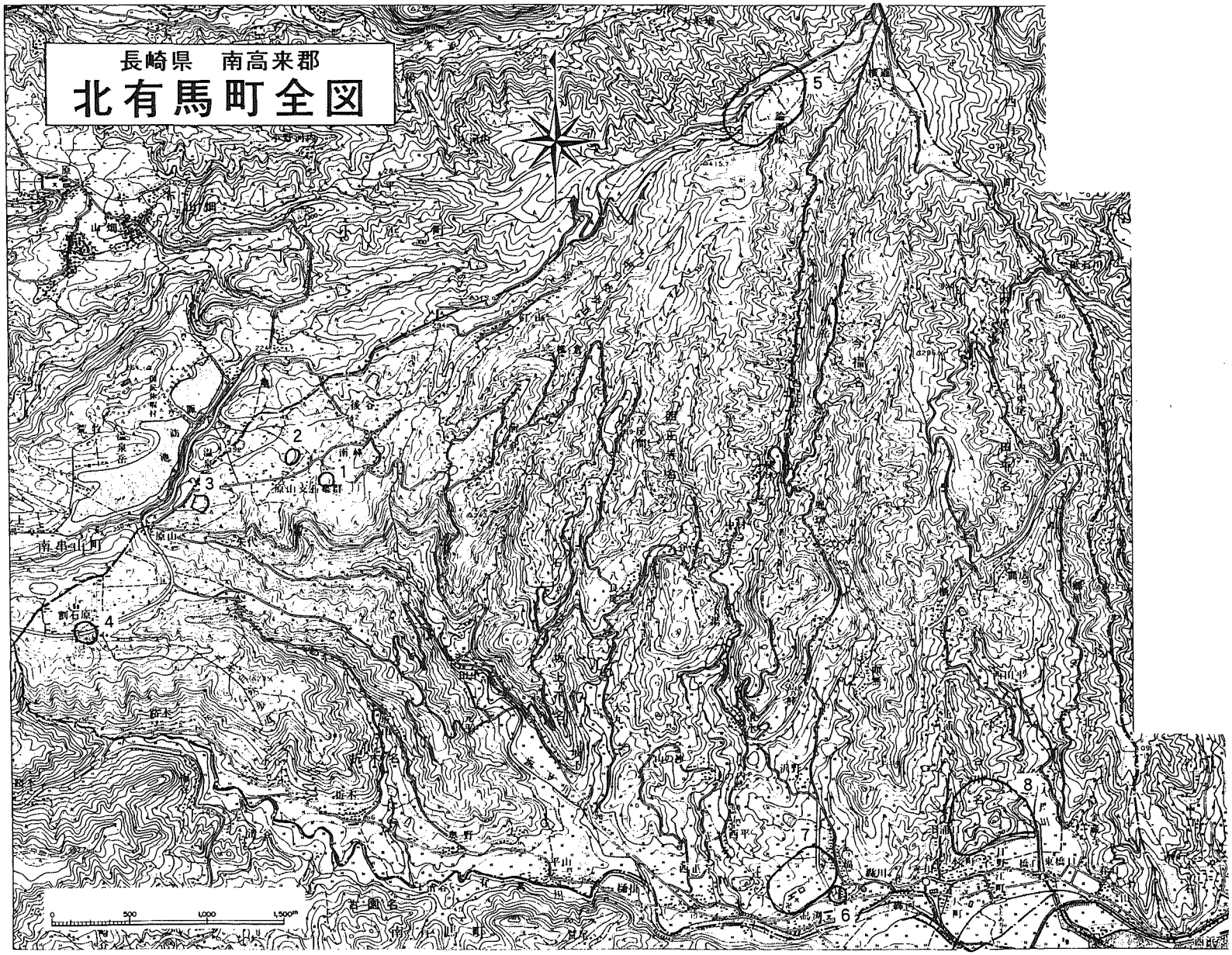
註１　町内の遺跡概要は各調査報告書および遺物包蔵地カードによる。

［引用・参考文献］

外山幹夫1980「日野江城」『日本城郭体系１７長崎・佐賀』新人物往来社

瀬野精一郎・外山幹夫編1987『長崎県地名大辞典』角川書店

長崎新聞社長崎県大百科事典出版局編1982『長崎県大百科事典』



第１図　原山支石墓群と周辺の遺跡位置図（S=1/37,500）

第Ⅱ節　調査の経緯(註1)

1．はじめに

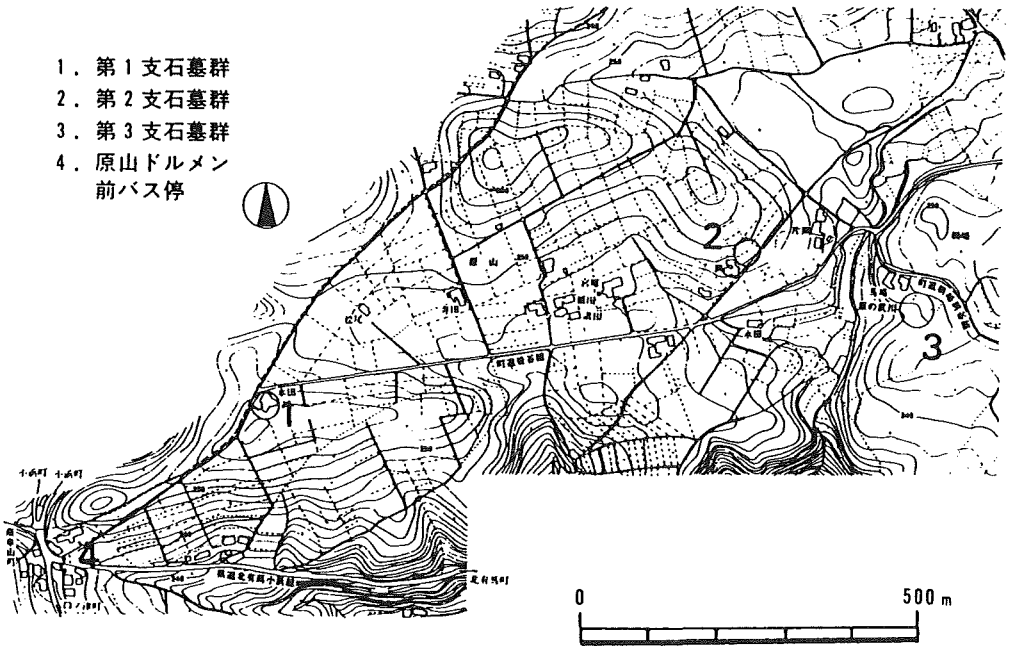
原山支石墓群は島原半島の南部にある北有馬町の北西部に位置し、小浜町や南串山町とも近接する場所に存在する。雲仙嶽の南山麓から派生する標高約250mほどの丘陵地に立地し、周辺の台地には畑が展開し、一部は水田となっている。原山支石墓群は戦後の食糧難にともなう開拓によって発見された遺跡である。

原山支石墓群の発見に至る経緯は松尾禎作氏の委嘱により1953年（昭和28）８月17日より20日に佐賀県文化財専門委員七田忠志氏と佐賀大卒業生宮崎静雄氏が現地を踏査。北串中学校教官馬場強氏（後の県立美術博物館学芸課長）も調査に加わったことに始まる（松尾1957）。

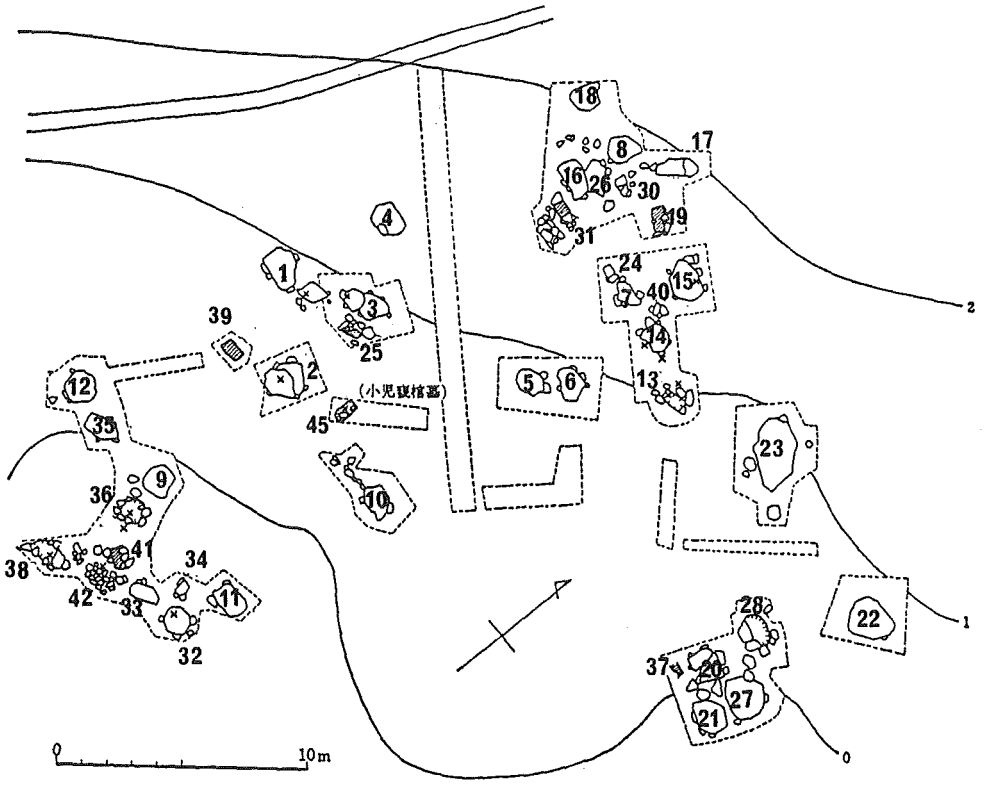
松尾は『日本考古学年報６』のなかで「（原山支石墓は）注意すべき貴重な資料であるにもかかわらず、再三長崎県の当局へ通報をされた由であるが、何等保存・保護の対策が講ぜられていないのは残念至極である」と記している。当時の文化財行政当局の対応については、古田正隆も『重要遺跡の発見から崩壊までの記録』のなかで再三指摘している。

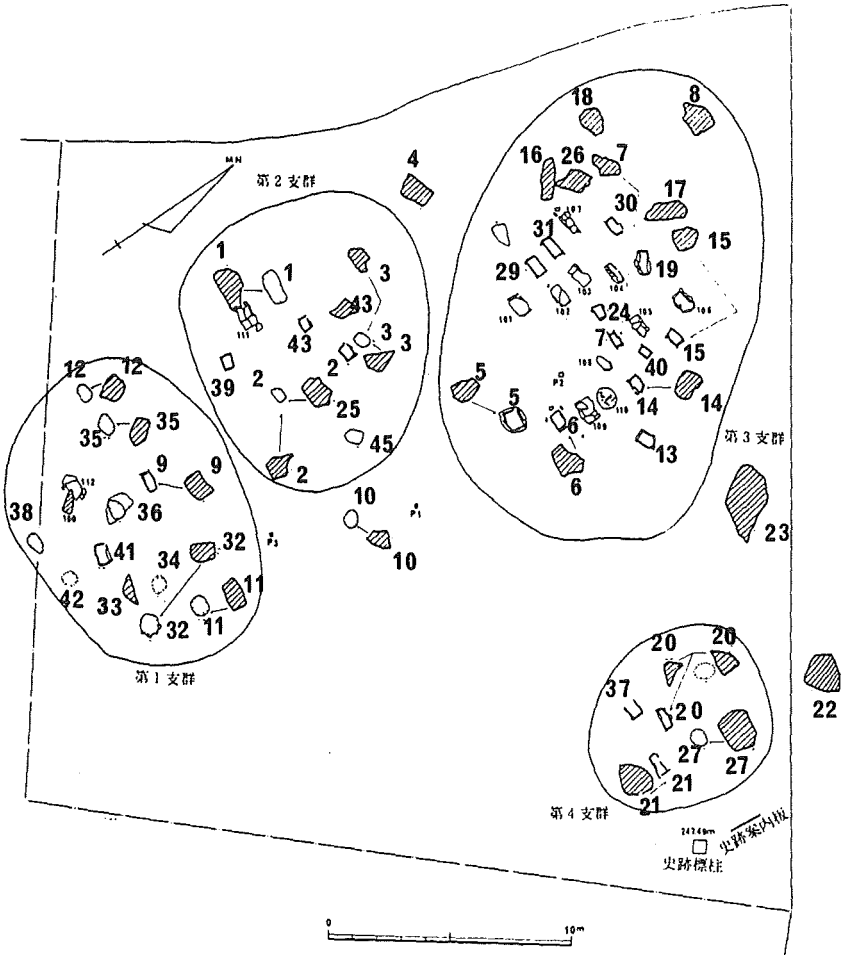
原山支石墓群は大きくは三群に分かれているが、調査者によって呼称に異同がある。ここでは原則として北有馬町教育委員会が作成した『環境整備事業報告書』で示された呼称に従いながら記述する（正林・高野1981）。

第１支石墓群は原山開拓地の入口にあり、古田によるとこの第１支石墓群の周辺に広がる台地には支石墓のほかに40基から50基の石棺群（Ａ地点）と、20基以上の石棺と石蓋土坑墓群があったという（Ｂ地点）。支石墓は14から15基を数えたというが、現在はすでに破壊され存存しない。

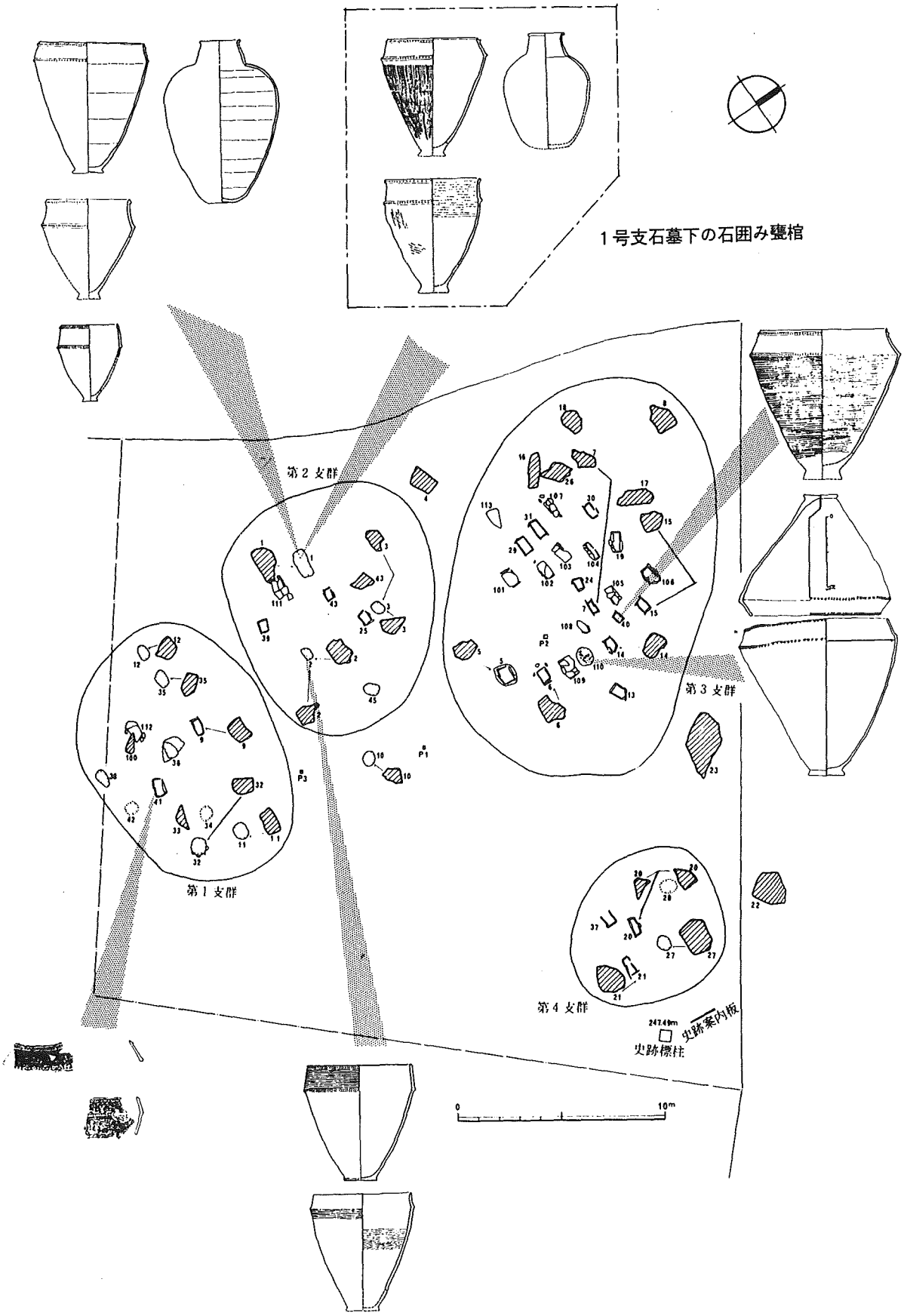


第２図　原山支石墓群位置図（Ｓ=1/13,500）





第３図　原山第３支石墓群の遺構（S=1/300）
上図：森1969、下図：正林・高野1981より転載・改変



第4図　原山支石墓第3群の過去の調査遺物（S=1/250）　土器はS=1/18

一方第２支石墓群は字新田にあり、古田によると「（昭和）30年頃に計算した集計では、支石墓約50基、石棺墓約50基程度であった模様」という（古田1974）。今は、かろうじて６基が現存し、国指定史跡となっている。第３群支石墓は字原ノ尻川に所在し、1956年（昭和31）８月に森貞次郎と石丸太郎の調査によって発見され、現在までに54基が確認されている。第３群も第２群と同様に国指定史跡となっている。

２．第１支石墓群の調査

第１支石墓群は1949年（昭和24）に開墾のため破壊された支石墓群である。破壊後の聞き取り調査によって次のような内容が記録されている。すなわち下部構造は方形に近い箱式石棺と土坑であること、土坑を内部主体とするものは支石「３、４個の中間あたりにかならず土器」が供献されていたこと、これらの土器は夜臼式系の壷形・甕形・浅鉢形などであること、小児甕棺が存在したことなどである（松尾1957）。破壊された支石墓群の配置を復元するため、1961年（昭和36）に地形測量が実施され、さらに残存する箱式石棺１基が発掘調査された。位置が確認できた支石墓は11基あり、そのうち７基が丘陵頂部の平坦地に密集していたという。丘陵頂部の平坦部については、試掘調査されているが包含層は存在しなかった。また、石斧・石鏃・山の寺式土器などの遺物散布がみられた丘陵東側斜面も耕作土の下は地山であるところから、この地区の遺跡のほとんどが流失してしまったと考えられている（森1962）。

３．第２支石墓群の調査

1956年（昭和31）８月の調査によって27基の遺構の位置が確認された。完存した第１号支石墓・第３号支石墓ならびに上石が除去された第４号石棺が調査された（森1961）。

４．第３支石墓群の調査

1960年（昭和35）に発掘調査された。「確認された遺跡42基、その中には方形に近い箱式石棺をもつものが21基、ほかに土坑墓13基、小児甕棺を内蔵したものが２基、ほかに方形の一側を欠いた石囲の中を壷と２個の甕の大片で囲ったもの（１号）があった。」という（森・岡崎1960）。

さらに1979年（昭和54）および1980年には原山遺跡環境整備事業に伴い、北有馬町教育委員会と長崎県教育委員会によって補完調査がおこなわれている。その際新たに14基の遺構が発見されているが、未発掘のまま現状保存された（正林・高野1981）。

［註］

註１　この章は『原始古代の長崎県　資料編Ⅱ』（長崎県教委1997）の「118原山支石墓群」の一部を転載し，改変したものである。

［引用・参考文献］

正林　護・高野晋司1981『国指定史跡原山支石墓群　環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会
長崎県教育委員会編1997『原始古代の長崎県　資料編Ⅱ』
古田正隆1974『重要遺跡の発見から崩壊までの記録』（百人委員会埋蔵文化財報告　第３集）百人委員会
松尾禎作1957「長崎県下の支石墓」『北九州支石墓の研究』松尾禎作先生還暦記念事業会
森貞次郎・岡崎敬1960「島原半島・原山遺跡」『九州考古学10』九州考古学会
森貞次郎1961「長崎県南高来郡原山支石墓群」『日本考古学年報９』日本考古学協会
森貞次郎1962「島原半島原山遺跡」『九州考古学１４』九州考古学会
森貞次郎1969「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』（のちに森貞次郎1983『九州の古代文化』六興出版に収録）

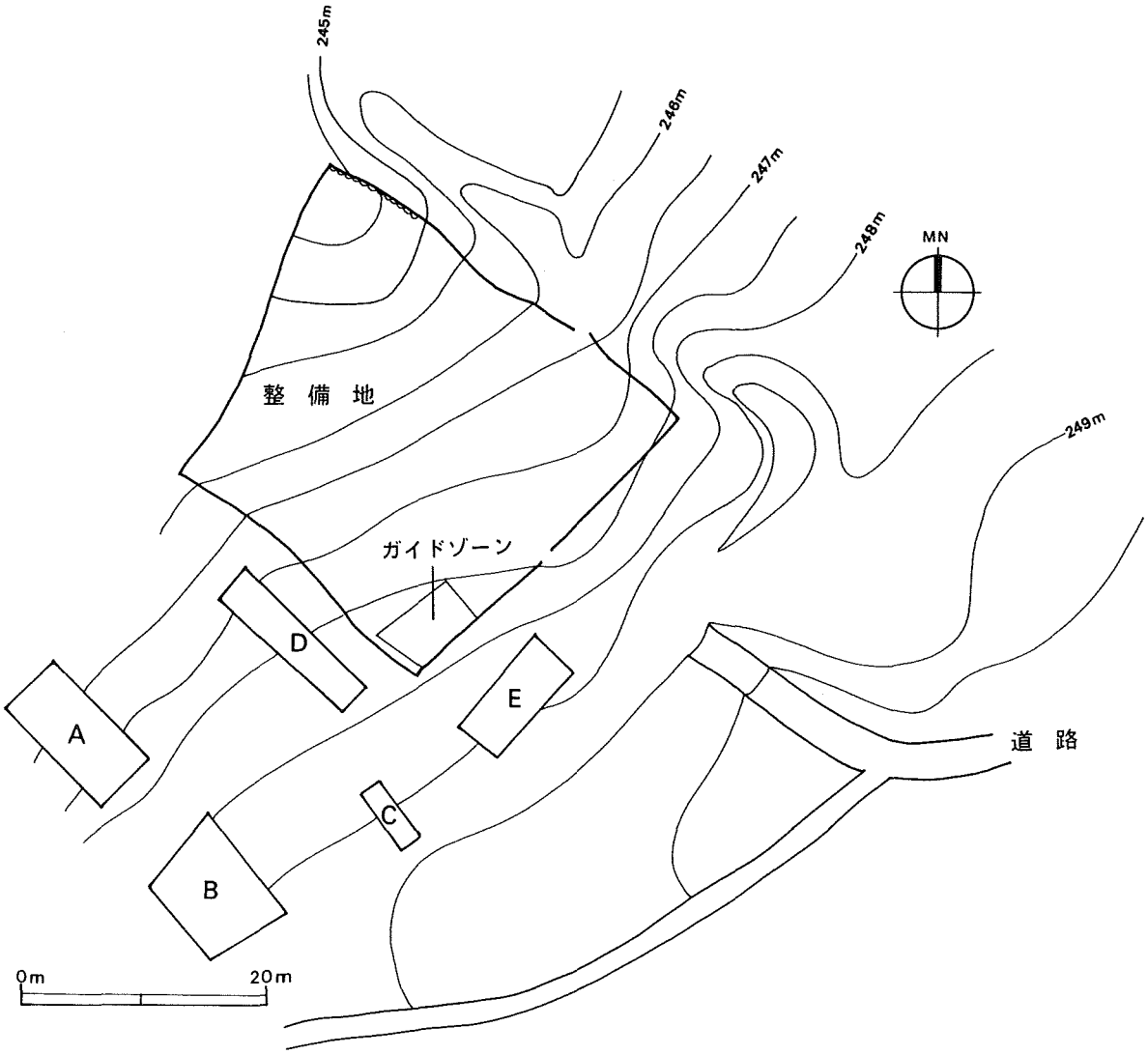
第Ⅲ章　主要遺跡内容確認調査の概要

第１節　調査の目的と方法

長崎県教育委員会は県内重要遺跡155箇所について，平成３年度より随時範囲確認調査を実施している。今年度から主要遺跡内容確認調査と事業名称の変更をしたが、先の事業の目的を踏襲し、本年度は本遺跡のほか上県町越高遺跡，佐々町狸山支石墓において調査を実施した。

調査対象となる遺構が上部構造をもつ支石墓ということで，表土剥ぎは重機が使用できず，人力でおこなわざるをえなかった。作業員の人数が少ないうえに調査面積が広く，夏の暑さも加わり２週間以上を要した。この時点で，残りの調査日数や作業員の人数を勘案し，グリッド法による対象地の全面調査をあきらめ，任意のトレンチ法に切り替えた。並行して地形測量を実施した（第５図）。その際，今回の調査に先立ち北有馬町が実施した対象地の面積測量では，公共座標を使用していなかったので，やむをえず任意の基準点を使用した。

今回は支石墓の基数確認が主目的であったため，土層観察用のセクションを設けなかった。そのため地山までの深さや土層の堆積状況は不明である。表土の下は赤褐色粘質土の第１層である。



第５図　調査区設定図（S=1/600）

原山第３支石墓群に連なる支石墓群の発見が期待されたが，表土を除去した段階で支石墓の上石らしきものは存在しなかった。所々に石塊が露出していたため，それらの石塊がかかるようにトレンチを設定しながら調査をおこなったが，ほとんどは自然石塊であった。トレンチはＡ～Ｅまで５本設定した（第５図）。各トレンチの状況は次のとおりである。

第２節　調査の概要

（１）Ａトレンチ

石塊は点在するものの支石墓の上石とみられるものは存在しない。トレンチの中央西寄りには後世の掘り込みが存在し，撹乱を受けている。

（２）Ｂトレンチ

第１層を15cm掘り下げると調査区の東南において集石遺構とピット群を検出した。さらにトレンチの北側に台形の石塊が存在し，その付近から供献土器と考えられる高杯形土器の脚が出土した。

また，トレンチの東側に10個のピットを検出した。

（３）Ｃトレンチ

第１層を20cmほど下げたが，均質な赤褐色粘質土（第１層）であった。支石墓らしき遺構は存在しない。

（４）Ｄトレンチ

第１層を20cm掘り下げたが，支石墓らしき遺構は検出できなかった。トレンチ中央部と北東コーナーには，土坑があったが，いずれも表土近くか，第１層の途中から切り込んだものであった。

（５）Ｅトレンチ

第１層を15cm掘り下げた。石鏃１点と横走する沈線を有する土器片１点が出土した。掘り込み痕や石材の抜き取り痕は観察できなかった。幅40～50cmの石塊が２個出土したが単独の自然石塊である。

（６）支石墓の可能性がある石塊について

調査区外ではあるがＥトレンチの南東に支石墓類似の石塊が単独で存在する。未調査のために支石墓であるかは不明である。

第3節　遺　構

（1）性格不明遺構（第6図）

Ｂトレンチの第１層を15cm掘り下げると調査区の東南において性格不明遺構とピット群を検出した。性格不明遺構は安山岩の角礫からなり，円礫はない。長さ20cmから大きい石で50cmほどである。角礫はトレンチ内で半円形を描くような分布を示す。半円の中心からやや南東にずれたところには直径60cmの範囲で炭化物と焼土が混在した部分が存在し，そのまわりには被熱して赤く変色した角礫や，熱により亀裂を生じた礫が存在した。さらにそのまわりには，炭化物を含んだ土が分布する。

さらにトレンチの北側に台形の石塊が存在し，その付近から高杯形土器の脚が出土した。脚はその場に据え置かれた形で出土し，杯部は削平されていたが原位置を保ったままの状態と考えられた。器形などから弥生時代後期に降るものと推定される。

（2）柱穴列（第6図）

Ｂトレンチの東側に10個のピットを検出した。いずれも直径15～20cmほどの大きさで，黒色土が充填している。１個のみ半截して状況を観察した結果，ピットの堀方は真直ぐで斜行せず，深さ10cm以上であることが解った。当初は杭列のようなものを推定したが，分布に規則性がみられないことから，その性格は不明とせざるをえない。

（3）遺構小結

この性格不明遺構は，火の使用や，１点のみであるが供献された高杯が出土しているところから，祭祀遺構とすることもできようが決め手に欠ける。

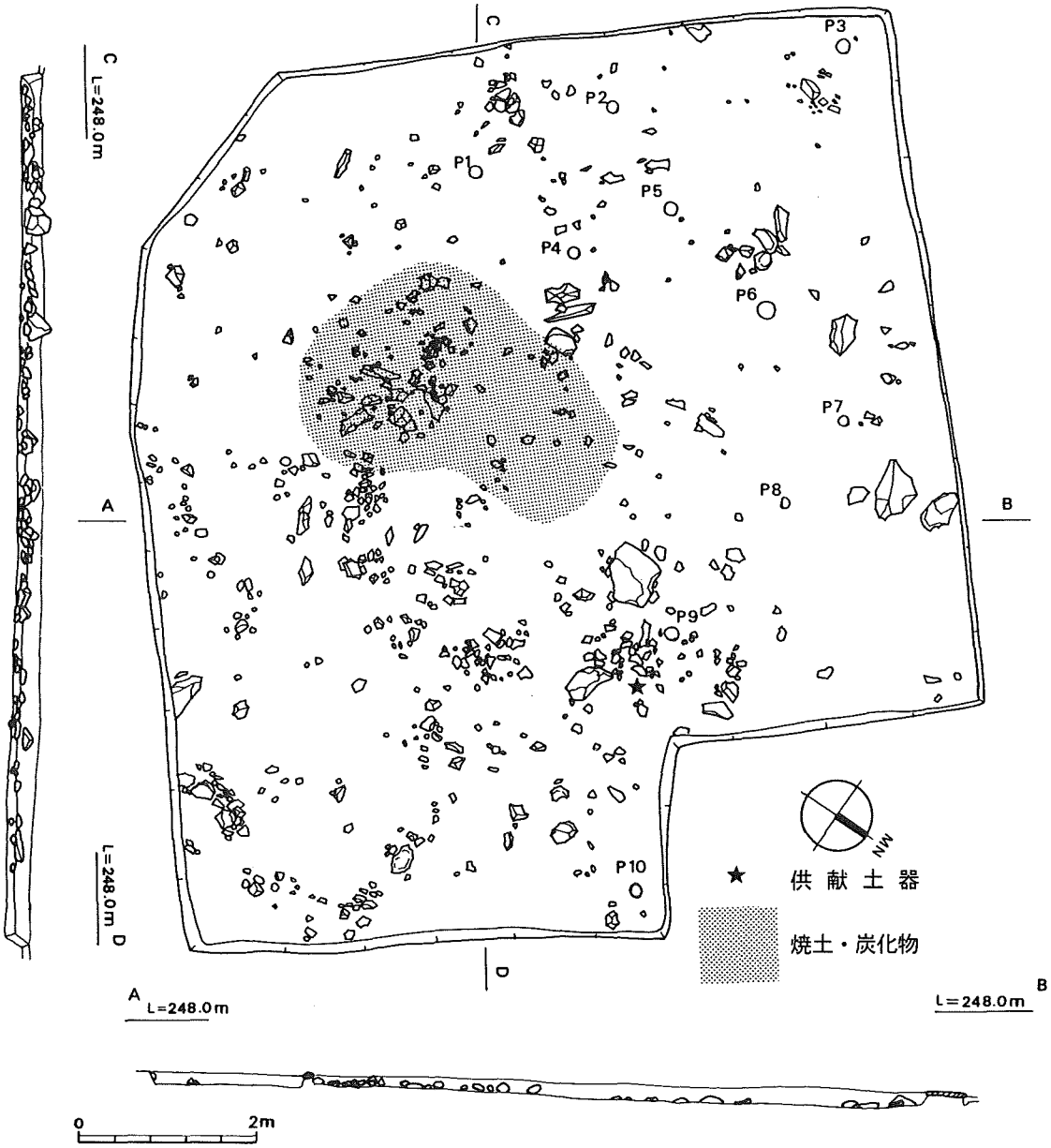
県内の弥生時代の祭祀遺構としては，大村市富の原遺跡の第１祭祀遺構・第２祭祀遺構や，諫早市林ノ辻遺跡の祭祀遺構などがある（秀島1983，稲富1987）。両者には複数の祭祀土坑が切り合いながら存在し，土坑の上位には角礫や円礫が配され，礫中には供献土器が細片となって混入するという共通点がある。しかし本遺跡の遺構には土坑はみられず，供献土器も少なく，両遺跡のものとは遺構の形態が異なるようである。

諫早市林ノ辻遺跡にはＧ５トレンチと名付けられた調査区から集石遺構が検出されている。集石遺構の範囲は「東西２ｍ，南北1.5ｍほど」で，全体の姿は明らかではないが，調査者は「祭祀的様相をもつ」としている。本遺跡の遺構は集石の在り方が，この林ノ辻遺跡Ｇ５調査区の集石遺構に類似するようである。しかし，火の使用や柱穴の存在，供献土器の出土の仕方など相違点も多い。

［引用・参考文献］

稲富裕和・橋本幸男編1987『富の原－大村市富の原１・２丁目に所在する遺跡群の範囲確認調査－』（大村市文化財調査報告書第１２集）長崎県大村市教育委員会

秀島貞康編1983『林ノ辻遺跡』（諫早市文化財調査報告書第４集）諫早市教育委員会



第6図　Bトレンチの性格不明遺構実測図（S=1/80）

第４節　出土遺物

いずれも表土ないしは第１層上面からの出土で，遺構に伴うものは，弥生時代の高杯形土器（第７図２）のみである。

１．石　器（第８図１～12）

１はナイフ形石器である。黒色黒曜石製で，表面はパティナが著しい。肉厚で左側縁および右下縁にブランティングを施す。２は台形石器である。ほぼ正三角形を呈する。左側縁にのみ主要剥離面側からのブランティングを施し，右側面は背面側からの剥離面を留める。流理の発達した黒色黒曜石製である。３は剥片である。小石刃とでも呼ぶべき小形で整った形状の縦長剥片である。背面片側に自然面を残す。腰岳産と思われる良質の黒色黒曜石製である。

以上の１・２は旧石器時代の遺物であり，３もその可能性が高い。

４～５は石鏃で，いずれもサヌカイト質安山岩製である。６は石鏃の先端部破片で，黒曜石製である。７は一応，石鏃と認定しておく。正面側は全周に丁寧な加工を施しているが，裏面は大きく主要剥離面を残しており，二次加工は頭部に限られる。サイドブレイドの可能性もある。黒色黒曜石製である。このほかに図示してないが，石鏃の胴部破片が１点ある。

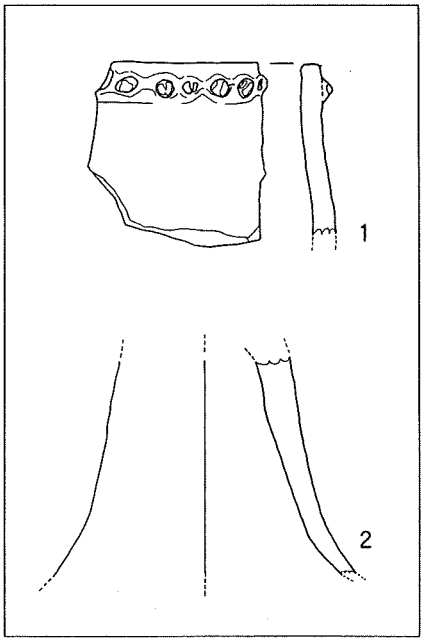
８は削器である。サヌカイト質安山岩製で，剥片の末端部に両面からの二次加工を施して刃部を形成したものである。９は磨製石斧である。かなり大型の磨製石斧で，刃部を欠損する。風化が激しく外見は灰白色を呈するが，石材は蛇紋岩である。

10～11は打製石斧である。いわゆる扁平打製石斧と呼ばれるもので，計５点出土している。いずれも安山岩製で風化が著しい。11は刃部が尖り気味である。12は磨石である。砂岩製で両面の平坦部が使用面である。おそらくは使用途中に破損したものと思われるが，その断面も丁寧に磨かれている。わずかながら窪んでいることから砥石としての転用が考えられる。このほか図示外の磨石（砂岩製）が１点あり，完形ながら被熱によりクラックを生じている。

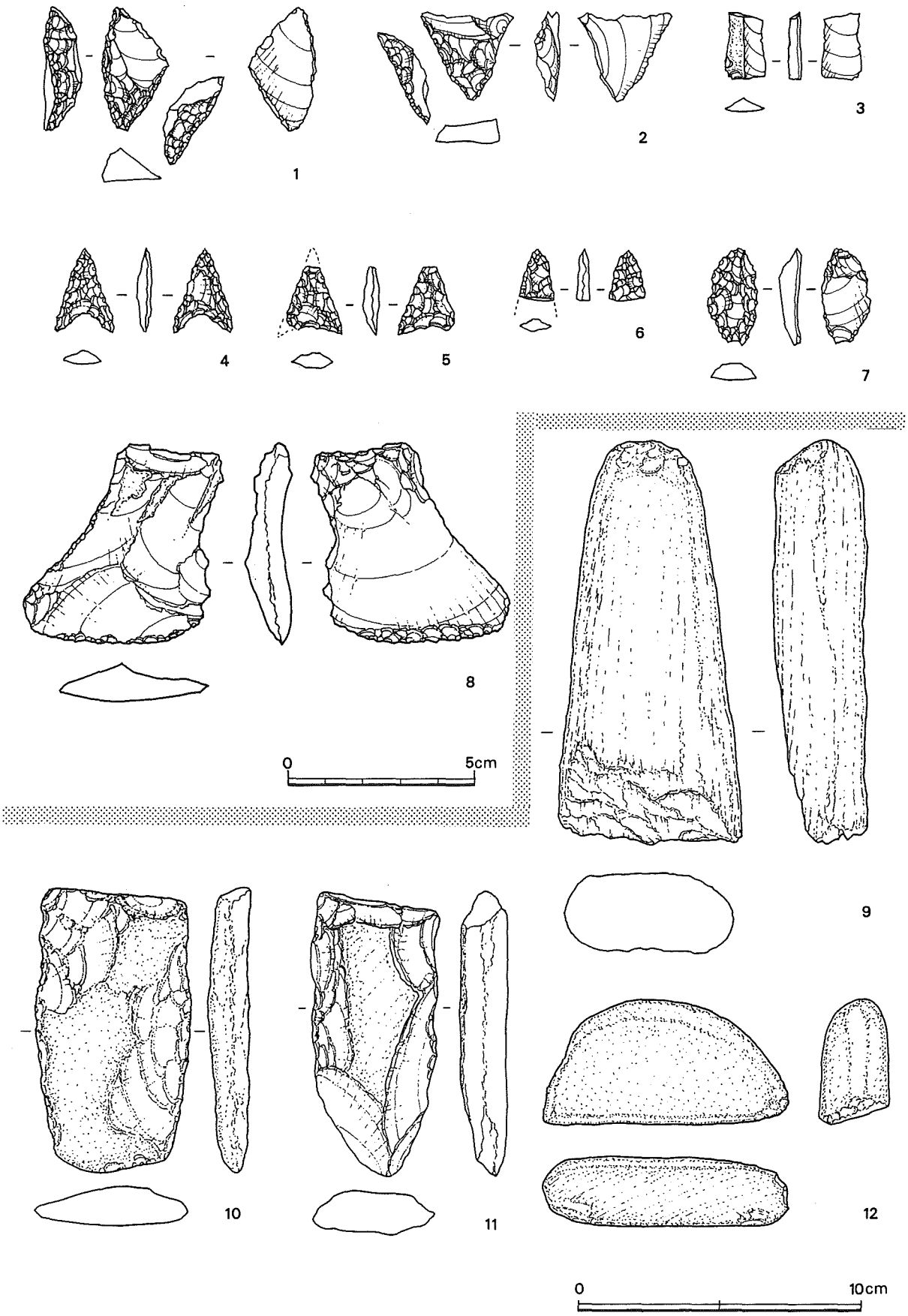
以上の８～12は，縄文時代の石器と考えられる。

２．土　器（第７図１・２）

１は刻目突帯文土器の深鉢形土器の口縁部片である。口縁部下に突帯を貼付し，刺突によって刻目を施す。内外面は擦過調整のあとナデられる。色調は褐色で胎土に赤色砂，長石，角閃石を含む。焼成はあまい。２は性格不明遺構の供献土器と思われる高杯形土器の脚部片である。色調は黄橙色で，胎土に砂粒，赤色砂，白色砂，角閃石を含む。焼成はあまい。表面の風化が激しく調整は不明である。器形や胎土等からみて弥生後期に属すると考えられる。



第７図　原山支石墓群出土土器
（S=1/3）



第８図　原山支石墓群出土石器

図　　版

図版①

原山農村公園

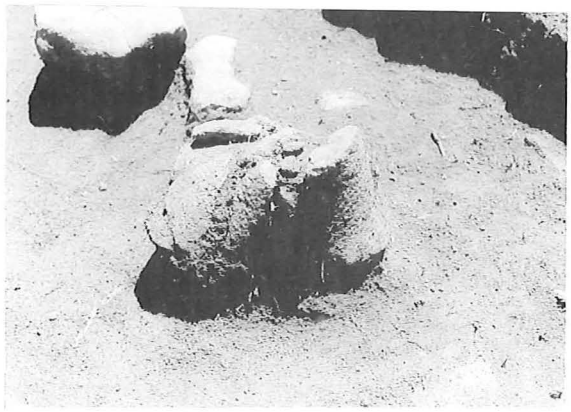
性格不明遺構（東から）

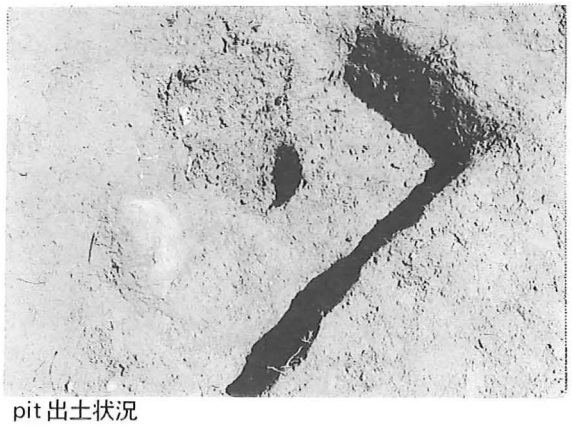
調査風景

性格不明遺構（北から）

供献高杯出土状況

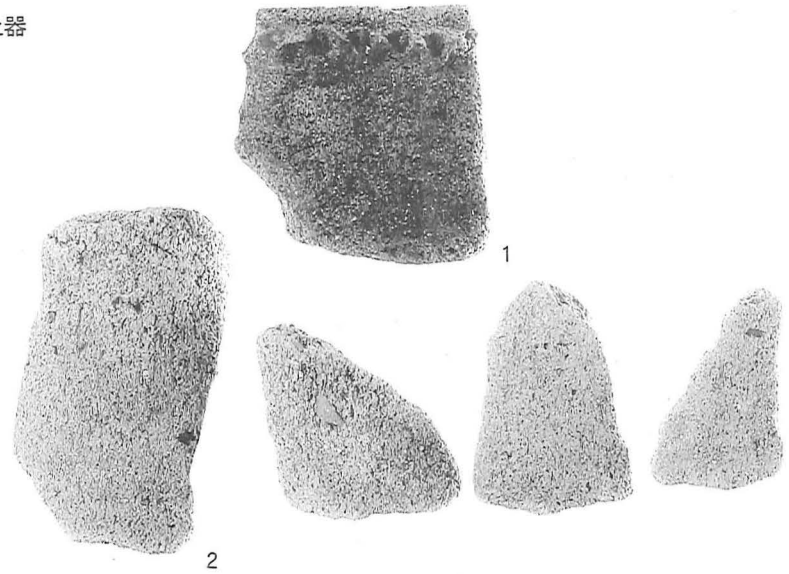
性格不明遺構（北東から）


供献高杯出土状況

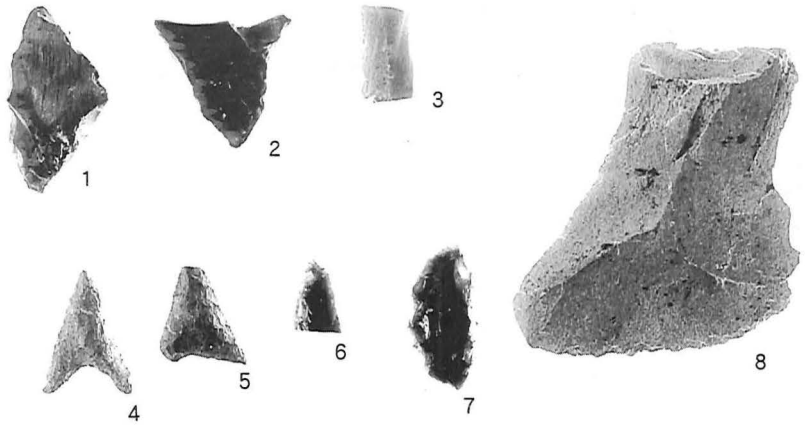

pit 出土状況

図版②

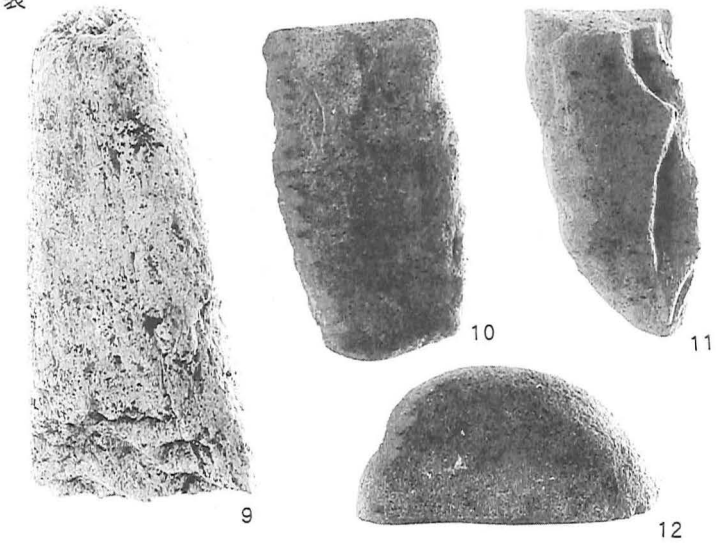
土器



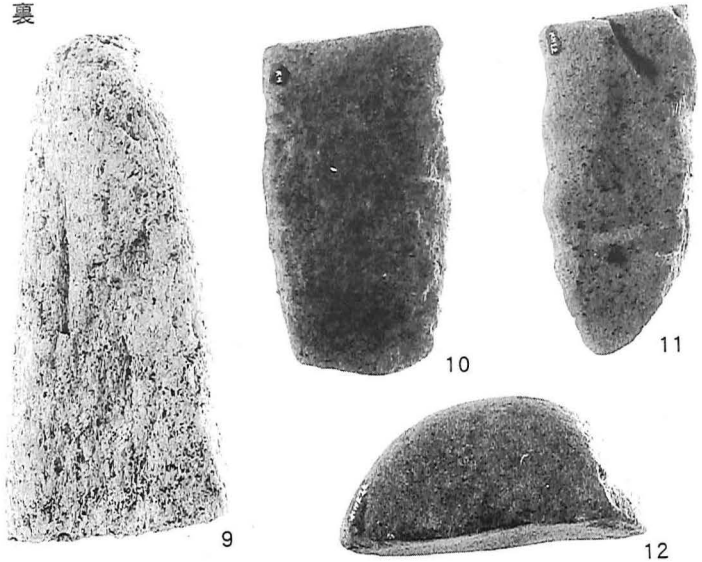
石器①



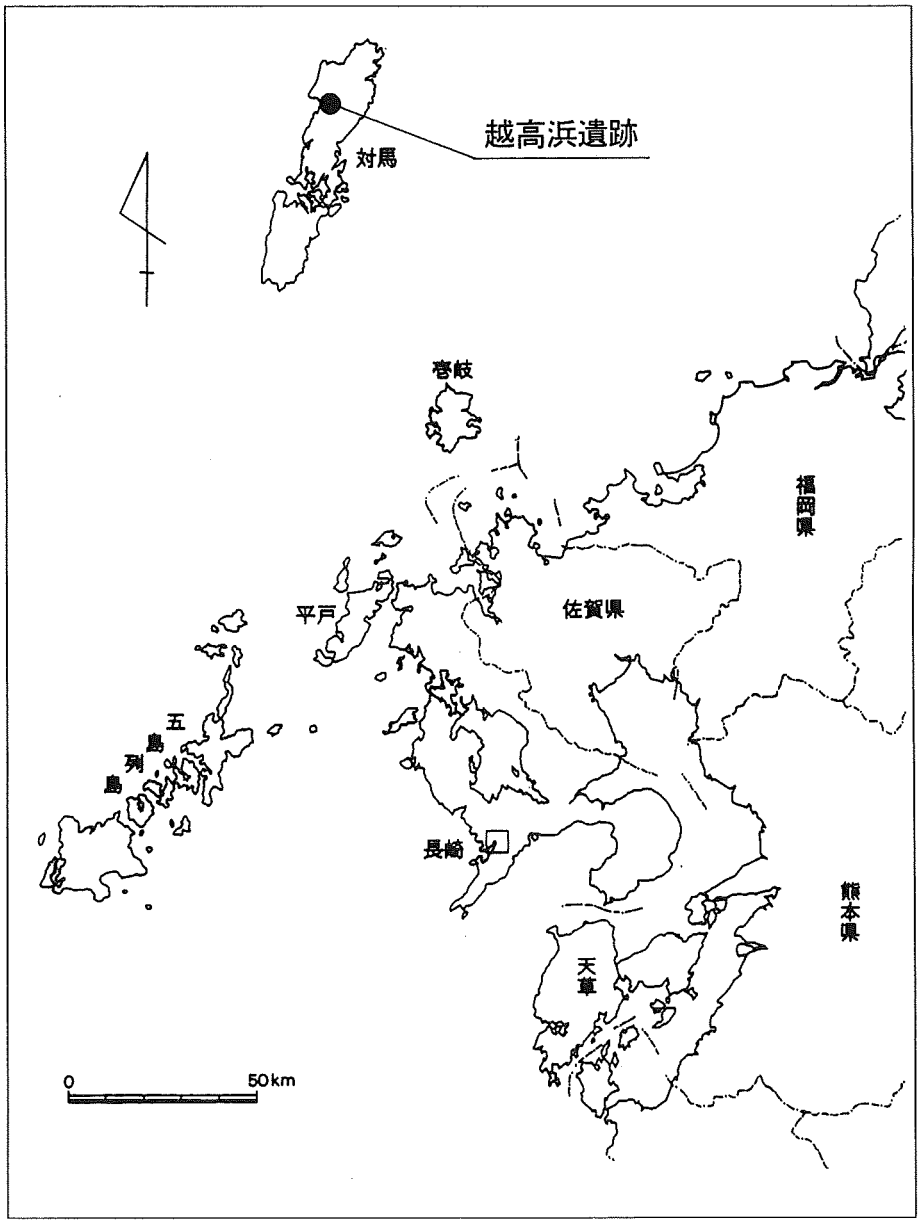
石器② 表



石器③ 裏



第Ⅱ部　越高浜遺跡



例　　言

1．本書は，長崎県上県郡上県町大字越高字孫坊隈に所在する越高浜遺跡の主要遺跡内容確認調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，上県町教育委員会の協力を得て，平成８年８月26日から９月13日まで実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	福田一志
	同	文化財調査員	東　貴之
調査協力	上県町教育委員会	社会教育課長	佐護文正
	同	派遣社会教育主事	吉田功造

4．製図は斉藤いづみ，渡邊洋子，近藤千鶴の協力を得た。

5．調査期間中の写真撮影は福田がおこなった。

6．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

7．本書の執筆は，福田一志，東　貴之が行った。出土遺物については土器を東が、石器を福田が担当した。

8．本書の編集は東による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境 …… 25
　第１節　地理的環境 …… 25
　第２節　歴史的環境 …… 25
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 28
第Ⅲ章　主要遺跡内容確認調査の概要 …… 28
　第１節　調査の目的と方法 …… 28
　第２節　出土遺物 …… 30
　　１　土　器 …… 30
　　２　石　器 …… 42
第Ⅳ章　総　括 …… 44
第Ⅴ章　　まとめ …… 46

挿 図 目 次

第１図　越高浜遺跡および周辺遺跡図（Ｓ=1/25,000） …… 26
第２図　越高浜遺跡調査区設定図（Ｓ=1/3,750） …… 29
第３図　越高浜遺跡出土土器①（Ｓ=1/2） …… 31
第４図　越高浜遺跡出土土器②（Ｓ=1/2） …… 33
第５図　越高浜遺跡出土土器③（Ｓ=1/2） …… 35
第６図　越高浜遺跡出土土器④（Ｓ=1/2） …… 37
第７図　越高浜遺跡出土土器⑤（Ｓ=1/2） …… 37
第８図　越高浜遺跡出土石器①（Ｓ=2/3） …… 43
第９図　越高浜遺跡出土石器②（Ｓ=2/3） …… 44

表 目 次

第１表　越高浜遺跡および周辺遺跡地名表 …… 27
第２表　第３・４調査区出土土器組成表 …… 39
第３表　第５調査区出土土器組成 …… 40
第４表　表採土器組成表 …… 41

図 版 目 次

図版①　越高浜遺跡遠景・近景および遺物出土状況 …… 51
図版②　出土土器① …… 52
図版③　出土土器② …… 53
図版④　出土土器③ …… 54

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

1．地理的環境

対馬は長崎県北西部に位置し，南北約82km，東西約18km，面積約698平方kmの広さをもつ島である。周辺には南東に壱岐・平戸・五島列島，北東には韓国がある。

対馬は行政上，上県郡と下県郡に区分される。かつては１つの島であったが，江戸時代に大船越瀬戸が開削されたことにより，上と下に分離され現在に至っている。

地形は島全体の89％を森林が占めており，残り11％は耕地・宅地・道路などに利用されている。その森林の割合は国有林８％，私有林92％である。

また，植生は海抜350ｍを境に上方はアカガシ林域，下方はシイ林域となっている。

上県町は御岳を中心とする山地丘陵の地形で，山間部を佐護川・仁田川が流れている。地質は古第三紀～新第三紀初頭に形成された対州層群を基盤としている。また北東部に位置することから，快晴時には千俵薪山から韓国釜山を望むことができる。

越高浜遺跡は上県郡上県町越高字孫坊深に所在する。周辺には仁田川・飼所川が流れており，現在河川の合流点を中心に集落が形成されている。この越高集落は漁業を主体としており，付近には越高漁港，また大漁を祭った住吉神社がある。本遺跡は越高漁港のある仁田湾内の海岸部に立地するが，現在，波の浸食により遺跡そのものが消滅しつつある。

2．歴史的環境

現在，上県町には41箇所の遺跡がある。時代別には縄文６・弥生29・古墳20・古代２・中世８・近世１となっている。特に弥生・古墳の遺跡が多く点在し，国指定史跡になっている塔の首遺跡（上県町古里字在所陽）も本町に存在する。

越高浜遺跡周辺にも遺跡は多く点在する。時代別にみると縄文３・弥生７・古墳４・古代１・中世１遺跡となっている。特に縄文時代の遺跡である夫婦石遺跡からは櫛目文土器が出土しており，縄文土器も確認されている。報告者によれば，時代は縄文時代早期～前期前葉で，遺物は瀛仙洞Ⅰ期まで遡るという（副島1992）。

［引用・参考文献］

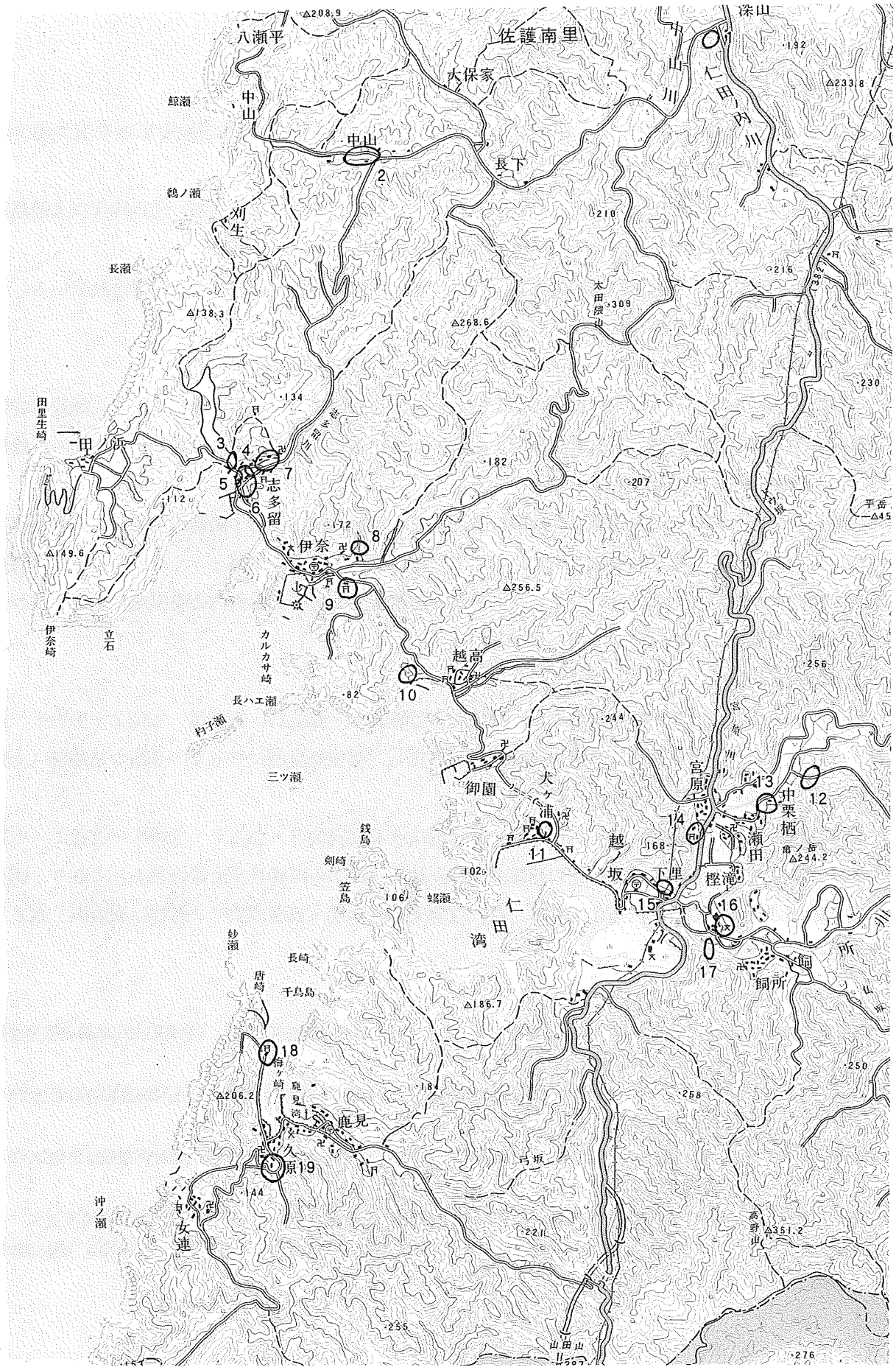
鎌田泰彦1991「Ⅱ　第１章　地理・社会的環境」『対馬天然記念物緊急調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第102集）長崎県教育委員会

鎌田泰彦1991「Ⅱ　第２章　対馬の天気」『対馬天然記念物緊急調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第102集）長崎県教育委員会

鎌田泰彦1991「Ⅱ　第３章　対馬の地形」『対馬天然記念物緊急調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第102集）長崎県教育委員会

長崎県教育委員会編1995『長崎県遺跡地図－対馬地区』（長崎県文化財調査報告書第118集）長崎県教育委員会

副島和明編1992「夫婦石遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報ＸＶ』（長崎県文化財調査報告書第104集）長崎県教育委員会



第１図　　越高浜遺跡および周辺遺跡図（S=1/25,000）

	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
1	ヘボノダン遺跡	上県町ヘボノ字東里	墳墓	丘陵	弥生
2	中山遺跡	上県町大平字南里中山字ヒラクマ	遺物包含地	台地	弥生
3	大将軍山古墳	上県町志多留大将軍山	古墳	丘陵	古墳
4	千人山古墳	上県町志多留字茂ケ	古墳	平地	古墳
5	万人山古墳	上県町志多留字向平	古墳	平地	古墳
6	志多留貝塚	上県町志多留字茂ケ	貝塚	平地	縄・弥
7	志多留遺跡	上県町字瀬滝	遺物包含地	平地	平・中
8	伊奈在庁跡	上県町伊奈	城跡	平地	平・中
9	伊奈久比神社遺跡	上県町伊奈伊奈久比神社	遺物包含地	丘陵	中世
10	越高浜遺跡	上県町大字越高字孫坊隈	遺物包含地	海岸	縄文
11	鉾山遺跡	上県町犬ケ浦字鉾山	墳墓	丘陵	弥生
12	亀の隈遺跡	上県町中栗栖字亀の隈	銅矛出土地	丘陵	弥生
13	サガリ積石塚	上県町瀬田字サガリ	積石塚	平地	弥・古
14	向隈遺跡	上県町久原字向隈	遺物包含地	平地	縄文
15	槻の内遺跡	上県町樫滝字中川	墳墓	丘陵	弥生
16	エイタイノ壇遺跡	上県町樫滝仁田エイタイノ壇	墳墓	台地	弥生
17	金幕遺跡	上県町樫滝キンマキ	墳墓	丘陵	弥生
18	夫婦石遺跡	上県町久原字夫婦石	遺物包含地	海岸	縄文
19	国本神社遺跡	上県町仁田	遺物包含地	平地	中世

表1　越高浜遺跡および周辺遺跡地名表

第Ⅱ章　調査の経緯

越高浜遺跡は過去２回越高・越高尾崎遺跡で調査されている。長崎県教育委員会では遺跡名を越高浜遺跡としている。越高・越高尾崎を含めた遺跡名として越高浜遺跡と呼んでおり，今回の報告書では越高浜遺跡の名称を使用する。また，越高・越高尾崎遺跡は越高浜遺跡におけるＡ・Ｂ地点（仮称）とした名称としたい。

本遺跡は過去２回調査が実施されたことは先述した。いずれも上県町教育委員会を主体とし，坂田邦洋を中心に調査を行っている。調査年は1976年（越高遺跡）と1978年（越高尾崎遺跡）である。

1976年の調査では町教育委員会・長崎大学医学部解剖学第２教室との共同調査である。調査区は2.5m×10.5m・3.0m×8.5mを２箇所設定している。この時の調査では層厚40cm～60cmの遺物包含層を確認している。遺物は縄文土器・半島系土器が出土している。調査を担当した坂田は半島系土器を，東三洞貝塚Ⅰ期の土器と類似すると報告している。また坂田は越高遺跡出土土器をⅠ～Ⅴ期に分類している。この坂田分類は型式学の視点から出土遺物を観察したものでなく，器形変化からの分類である。したがって，時間的編年を示すものではない。

1978年は上県町教育委員会主体で調査を行った。調査区は１箇所設定し，遺物包含層も確認された。層位は６層に分層，それぞれの層から土器が出土している。

第１・２層…曽畑式土器と半島系土器が出土

第３層…轟式土器

第４層…轟式土器・塞ノ神式土器・半島系土器

第５層…半島系土器

第６層…縄文土器（１点）・半島系土器（隆起文土器）

また３基の炉跡が第２層と第４層から検出されている。前者は２基確認され，円形状の人頭大・小形礫の配石が検出された。後者は直径１m以上の大形炉が確認され，礫を配石している。

このように越高遺跡・越高尾崎遺跡は良好な資料を提供している。ただし資料操作自体に問題があることから，研究者にとって評価が難しい遺跡となっている。

第Ⅲ章　主要遺跡内容確認調査の概要

１．調査の目的と方法

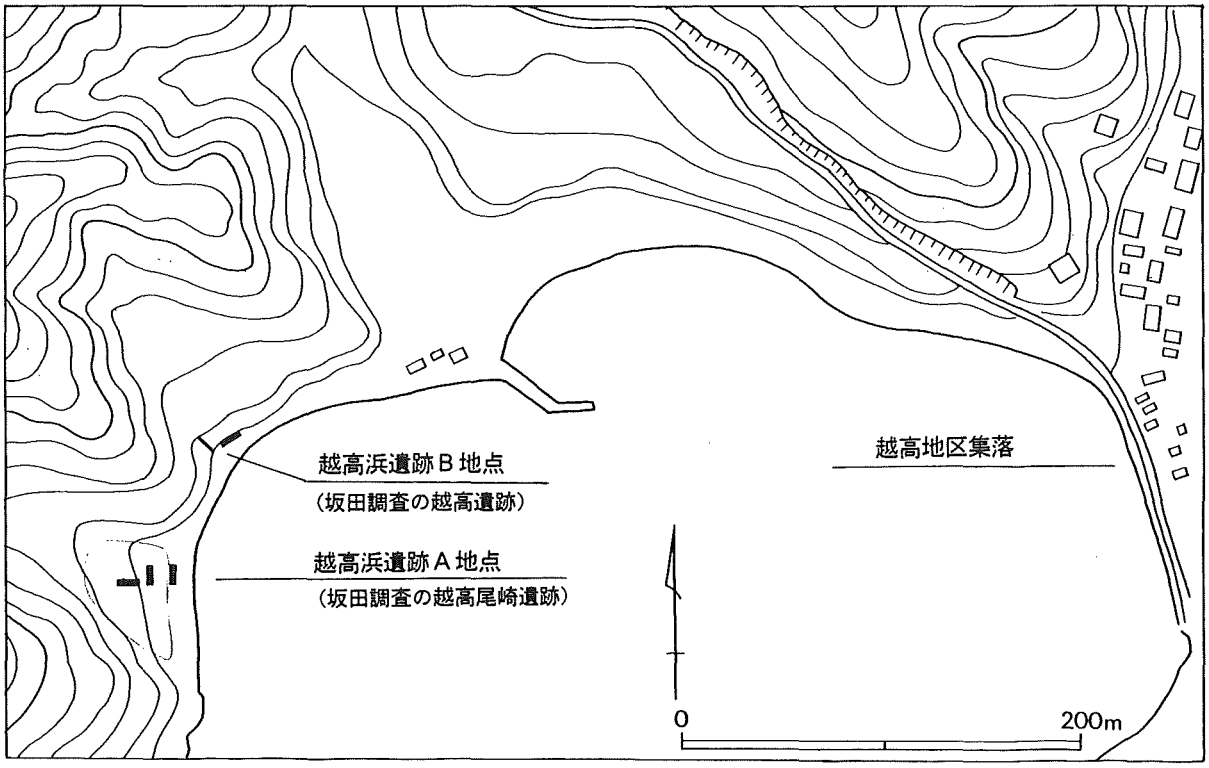
越高浜遺跡は海水の浸食による影響で，消滅段階にある遺跡と述べた。今回の調査で海岸部の地形は前回の調査と比べ，かなり後退している。調査は消滅段階にある遺跡全体の範囲確認を目的とし，平成８年８月26日から９月13日まで実施した。

調査区は４箇所（６m×２m・８m×２m・９×２m・10m×２m）設定した。Ａ地点（越高尾崎）は３箇所，Ｂ地点（越高）は２箇所である。

調査の結果，遺構は確認されなかった。第１・２調査区は山の斜面に設定・調査を行ったが，層位

はすべて頁岩（対州層群）が堆積したもので構成されていた。深度は約３ｍまで下げて調査したが，頁岩の崩壊が著しく，作業員の安全性を考えて調査は中止した。第１・２調査区で最も深い箇所は標高０ｍ近くに到達，また海水が侵入してきた。第３調査区は第１・２調査区下の海岸部に設定・調査を行ったが，地権者の反対でやむを得ず地表下約15cmの深度で調査を中止した。標高は０ｍ付近である。遺物は隆起文土器・沈線文土器が出土した。また，頁岩製のスクレイパーも確認された。

土色は暗茶褐色をした砂質をしており，浸食を受けているとはいえ，遺物包含層の可能性は大きい。第４調査区も第３調査区同様，海岸部に設定した。この調査区は越高遺跡の調査区と近接していたため，前回の調査区と重複している可能性が高い。調査の結果，隆起文土器数点が確認された。層位はすべて頁岩が堆積した状況であった。その後調査区を設定する箇所がなく，崖面に土器が露出していた箇所を第５調査区として設定・調査を行った。調査は崖面を削平する方法で，隆起文土器・沈線文土器が多量に出土した。



第２図　越高浜遺跡調査区設定図（Ｓ=1/3,750）

2．出土遺物

調査で出土した遺物数は少ない。土器はパンコンテナ２箱，石器はパンコンテナ半箱分である。特に土器は小破片が多く，器種・文様の種類などの判明が困難であった。

(1) 土　器

各調査区ごとに説明をする。また，土器そのものが縄文土器にはない特色をもつため，説明は１点ずつすることにした。

第３調査区出土土器（第３図１～19）

１は深鉢形土器。部位は口唇部から胴部。口唇部はやや内湾気味になる。体部上半に横走する隆線を有し，幅は４㎜程度である。口唇部に3.1個／㎝の割合で刻みが施されるが，摩滅が著しい。調整は内・外面ともに貝殻条痕後にナデ消しされている。隆線部より上は横方向の明瞭なナデ痕が認められる。

２は深鉢形土器。口縁部に沈線文が施される。また，口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部はヘラ状工具によって平坦にされている。沈線文の下部には横走沈線が施される。調整は内・外面ともナデが施され，一部指圧痕も確認される。沈線幅は２㎜。

３は深鉢あるいは鉢形土器。胴部の粘土紐をつまみ上げて口縁・口唇部を成形している。口唇部はヘラ状工具によるナデが施されるが，口唇部に並行したキズがあるため，指ナデの可能性も高い。調整は内・外面ともに貝殻条痕の後にナデを施している。

４は深鉢あるいは鉢形土器。口縁部から口唇部にかけて垂直に立ち上がる。口唇部はヘラ状工具によって平坦に作られる。調整は内・外面とも貝殻条痕が残るが，いずれもナデ消しが施される。

６の部位は不明。外面調整はナデ，内面調整は貝殻条痕が施されている。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合であることがわかる。

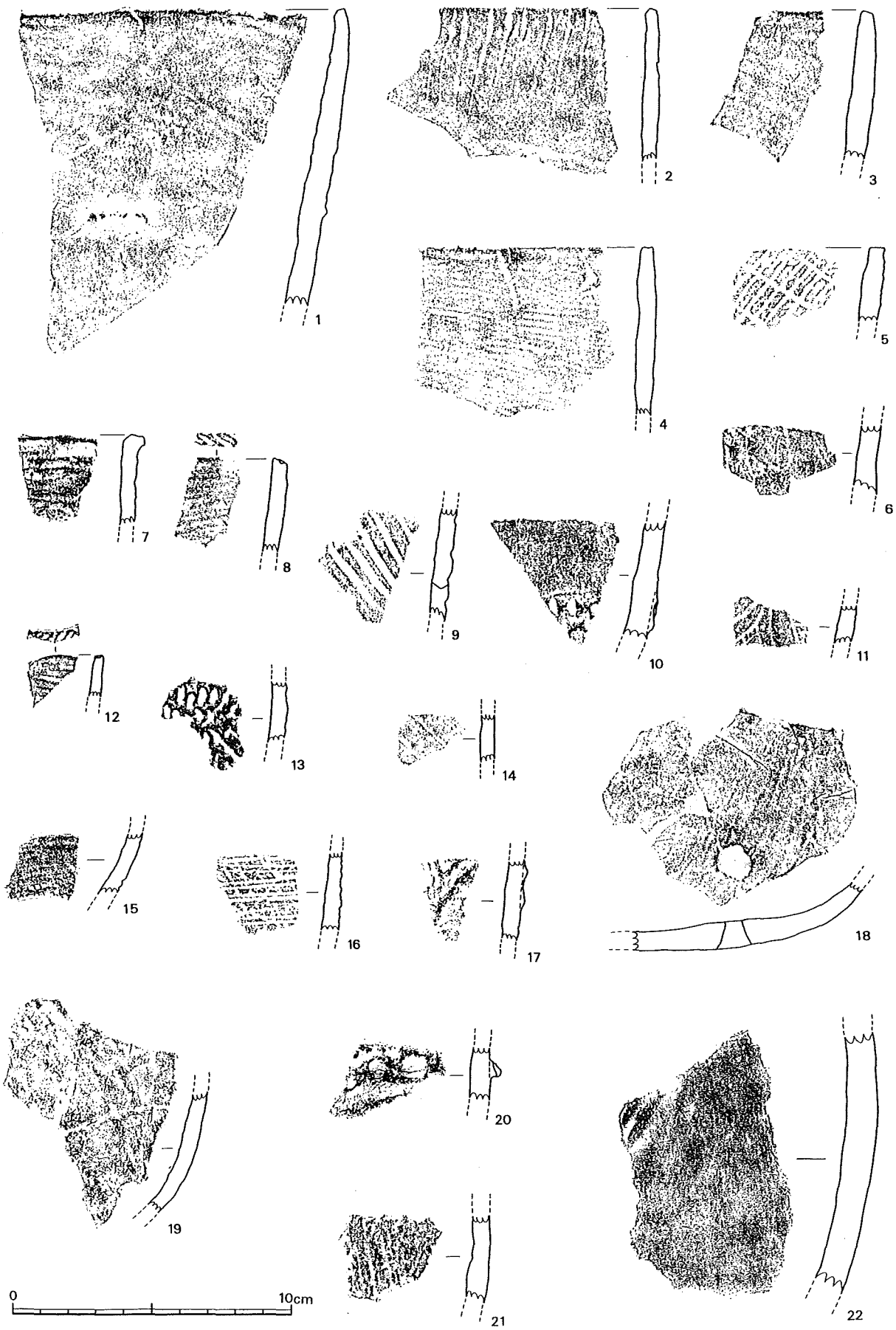
７は深鉢あるいは鉢形土器である。口縁が肥厚し，口唇部を外側につまみ出している。内・外面とも貝殻条痕の後にナデ消しによる調整が確認される。口唇部も同様，貝殻条痕後のナデ消しが口縁部と同方向に施されている。

８は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁・口唇部。口唇部はヘラ状工具による刻みが施される。内・外面は貝殻条痕後にナデによる調整が施される。３同様，貝殻条痕はかすかに残る。

９の器種は不明。斜行する平行沈線文が施される。左下部に穿孔の跡がみられる。沈線上で割れているため，穿孔の残存は半分である。内・外ともナデによる調整痕を残す。夫婦石遺跡出土土器にも類例がある。

10の器種・部位は不明。横走する隆帯を２本確認。いずれも丸棒状工具による刺突文である。内・外面ともにナデによる調整が施されており，外面には赤色顔料の痕跡を確認することができる。

11は器種・部位ともに不明。沈線文が施されており，煙臺島貝塚出土深鉢形土器に類似する（註１）。ただし，沈線は煙臺島貝塚のものは直線で，11は曲線である。また，長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土土器にも類例が確認されるが（報文第７図３），沈線文は直線である（有川町1996）。粘土接合部は内傾の接合痕を残す。内・外面はナデによる調整が施されている。



第３図　　越高浜遺跡出土土器①（S=1/2）

12は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁・口唇部である。口縁部はやや外反する。口唇部には丸棒状工具による刻みが施される。内・外面はナデによる調整が施される。

13は器種・部位ともに不明。丸棒状工具による連続した刺突が施される。内・外面はナデによる調整が施されている。13は時期が新しく，瀛仙洞Ⅰ・西唐津期に相当する可能性が高い。類例を朝島貝塚に求めることができる（註２）。

14は器種・部位ともに不明。斜行する沈線が施される。調整は内・外面ともにナデが施されている。粘土紐接合部は内傾接合である。胎土・調整は２と類似する。

15は器種・部位ともに不明。細い丸棒状工具の先端による刺突文が確認される。刺突文は２列確認することができる。粘土接合部は内傾接合を残す。調整は内・外面ともにナデが施される。

16は器種・部位ともに不明。斜行沈線の後に横走する平行沈線が施された格子目文である。調整は内・外面ともにナデによって施される。

17は器種・部位ともに不明。隆帯は斜行しており，ヘラ状工具による刻みが施される。調整は内・外面ともにナデが施される。

18の器種は不明。部位は底部。底部は平底であるが，胴部との境をもたない。越高尾崎遺跡出土土器に類例が確認される（註３）。内面はナデによる調整，外面は貝殻条痕後にナデ消しによる調整が施されている。底部外面からの穿孔が確認される。

19の器種は不明。胴部から底部にかけての部位が確認される。底部の残存状況から尖底丸底の可能性が高い。内・外面調整は貝殻条痕後のナデ消しが確認される。

第４調査区出土土器（第３図20～22）

20は器種・部位ともに不明。横走する隆帯は丸棒状工具による刺突が施される。内・外面ともナデによる調整が確認される。

21は器種・部位ともに不明。斜行する沈線文が施される。沈線は明確ではなく，櫛描き状に軽く施したものである。内・外面ともナデによる調整が施され，内面には指圧痕も確認される。粘土接合部で割れており，粘土紐は内傾接合である。

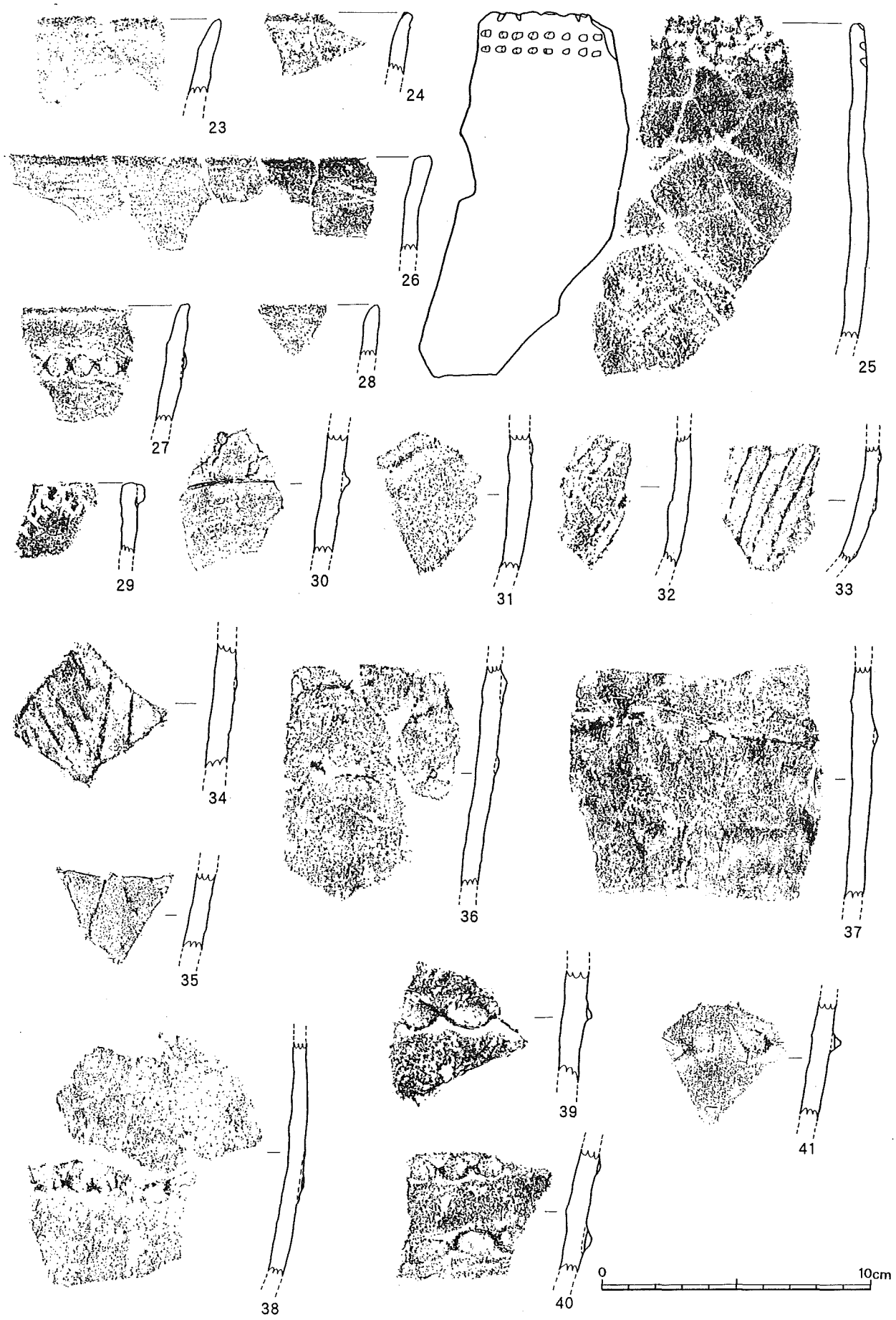
22は器種・部位ともに不明。斜行する隆線をもつ。調整は内・外面ともにナデによる調整が施される。他の土器と比べ，器厚は12mmある。粘土接合部は内傾接合である。

第５調査区出土土器（第４図23～32）

23は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁部。口縁部は外反する。文様は確認されないが，胴部に文様をもつ可能性はある。内・外面ともにナデによる調整が施される。

24は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁部。口唇部には丸棒状工具による刻みが施される。口縁部は外反する。内・外面ともにナデによる調整が施される。

25は深鉢形土器。部位は胴部～口縁部。胴部上半から口縁部にかけて垂直に立ち上がる。また，胴



第４図　　越高浜遺跡出土土器②（S=1/2）

部下部からは内湾気味になる。底部形態は不明であるが，尖底あるいは尖底丸底の可能性が高い。口縁部には丸棒状工具による２列の刺突列点文が施される。口唇部には丸棒状工具による刻みが施されるが，摩滅している。内・外面ともにナデによる調整が施されるが，内面には指圧痕が確認される。

26は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁部。口唇・口縁部に文様は確認されないが，胴部には文様施文の可能性が高い。口縁部から口唇部にかけて肥厚し，口縁部は外反する。調整は内・外面ともにナデが施され，口唇部もナデによる調整が認められる。

27は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁部。口唇部は外上方につまみ出される。口縁部直下に隆帯が横走する。隆帯はヘラ状工具による刻みが施される。内・外面はナデによる調整で，内面には指圧痕も確認される。口縁部にも指圧痕が残る。

28は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁部である。内・外面ともにナデによる調整が施される。

29は深鉢あるいは鉢形土器。部位は口縁部。山形の隆帯が施される。隆帯はヘラ状工具による刻みが鋭く施される。内・外面ともにナデによる調整が確認される。

30は器種・部位ともに不明。横走隆線上に斜行刺突が施される。刺突文はヘラ状工具によるもので，２列確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。

31は器種・部位ともに不明。内・外面ともにナデによる調整が施される。また，内面には指圧痕も確認される。

32は器種・部位ともに不明。斜行する隆線が施される。隆線は一部剥落した箇所が確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。

33は器種・部位ともに不明。斜行する平行隆線が施される。調整は内・外面ともナデによる調整が施されており，内面には指圧痕が確認される。粘土紐接合部は内傾接合である。器種を不明としているが，土器の屈曲からすると深鉢あるいは鉢形土器の可能性が高い。類例として煙臺島貝塚出土の鉢形土器がある（註４）。

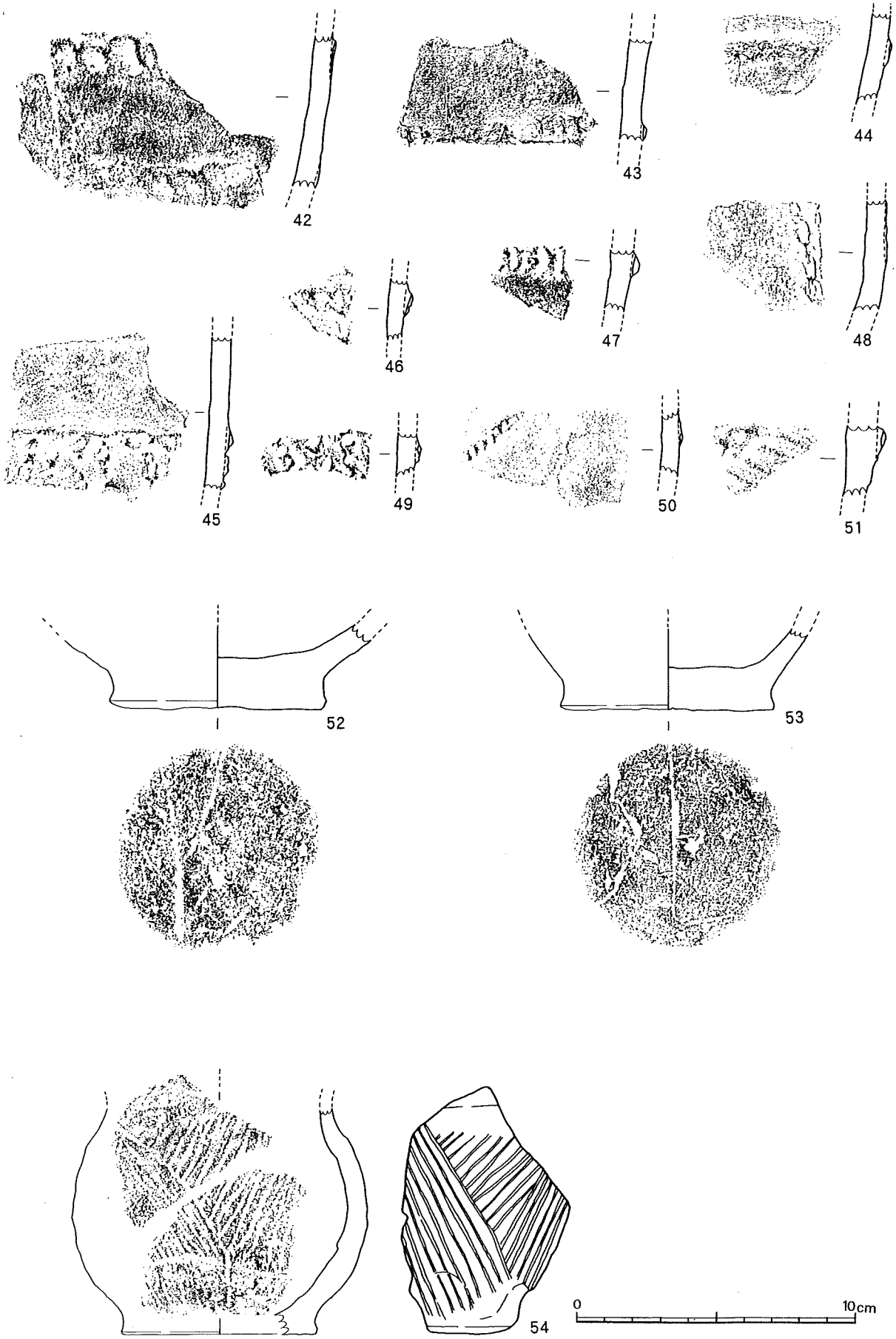
34は器種・部位ともに不明。斜行する隆線が施される。隆線は複数確認され，全体として山形に近い文様である。隆線はやや摩滅している。内・外面ともにナデによる調整が施される。

35は器種・部位ともに不明。斜行する隆線が複数施され，全体として山形文になる可能性が高い。内・外面ともにナデによる調整が施される。

36は深鉢あるいは鉢形土器。部位は胴部。横走する隆線が施される。他に横走隆線・斜行隆線と思われる箇所があるが，断定はできない。内面は横方向のヘラ状工具による調整，外面はナデによる調整が施される。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合が確認できる。

37は深鉢あるいは鉢形土器。部位は胴部。文様は横走隆線が施されるが，剥落した箇所も確認される。内面はヘラ状工具，外面はナデによる調整が施される。外面には指圧痕が認められる。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合が確認できる。また，14と焼成・胎土が類似していることから，同一個体の可能性が高い。

38は深鉢あるいは鉢形土器。部位は胴部。横走する隆帯が施されるが，一部剥落個所も確認される。



第５図　越高浜遺跡出土土器③（S=1/2）

隆帯は刻みが施されるが，摩滅しているので工具類の限定はできない。内・外面ともにナデによる調整が施される。内面には指圧痕が確認される。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合である。

39は器種・部位ともに不明。横走隆帯が施される。隆帯には指圧調整により成形されている。内面はナデ・指圧痕，外面はナデによる調整が認められる。

40は器種・部位ともに不明。横走隆帯が２本確認される。隆帯はいずれも指圧調整が施される。内面調整はヘラ状工具，外面調整はナデである。また内面には指圧痕が確認される。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合である。

41は器種・部位ともに不明。横走隆帯が施され，一部剥落した箇所が確認される。隆帯は指圧調整によるものである。内・外面ともにナデによる調整が施される。

42は深鉢あるいは鉢形土器。部位は胴部。平行する横走隆帯が２本施される。隆帯は摩滅しているが，ヘラ状工具による刻みが確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合である。

43は器種・部位ともに不明。横走する隆帯が確認される。隆帯はヘラ状工具による刻みが施される。文様は摩滅している。内・外面ともにナデによる調整。胎土は砂質の割合が多い。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合である。

44は器種・部位ともに不明。横走する隆帯が施される。隆帯はヘラ状工具による刻みが確認される。文様は摩滅している。内・外面ともにナデによる調整。胎土は砂が多く含まれており，土器表面が剥がれやすく，脆い。

45は深鉢あるいは鉢形土器。部位は胴部。横走する隆帯，隆帯直下に５本の斜行する隆帯が確認される。斜行する隆帯は「ハの字形」になっており，複線山形文の可能性が高い。いずれもヘラ状工具による刻みが施される。内・外面ともにナデによる調整が施される。粘土紐接合部で割れているため，内傾接合である。

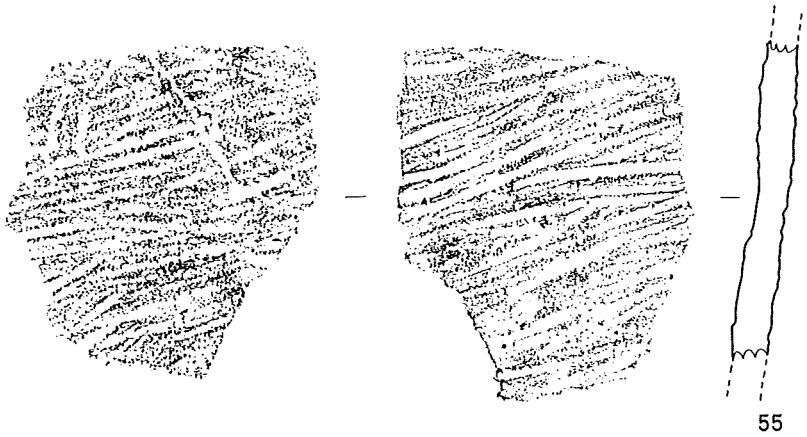
46は器種・部位ともに不明。横走する隆帯が施され，ヘラ状工具による刻みが確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。。

47は器種・部位ともに不明。横走する隆帯が施され，隆帯にはヘラ状工具による刻みが確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。粘土接合部で割れている。

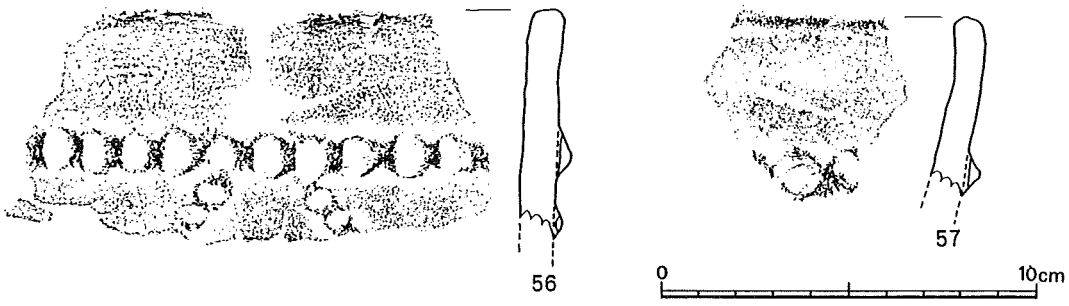
48は器種・部位ともに不明。斜行する隆帯が施される。隆帯は丸棒状工具による刺突が確認される。内・外面ともナデによる調整が施され，指圧痕も確認される。粘土接合部で割れているため，内傾接合である。

49は器種・部位ともに不明。斜行する隆帯が施され，ヘラ状工具による刻みが確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。

50は器種・部位ともに不明。斜行する隆帯が施される。隆帯はヘラ状工具による刻みが確認される。内・外面ともにナデによる調整が施される。外面には赤色塗彩が確認される。内面は指圧痕が認められる。



第６図　越高浜遺跡出土土器④（Ｓ=1/2）



第７図　越高浜遺跡出土土器⑤（Ｓ=1/2）

51は器種・部位ともに不明。横走する隆帯直下に斜行隆線が施される。隆帯は丸棒状工具による刺突が確認される。隆帯そのものは摩滅している。内面はナデによる調整が施される。

52は器種・部位ともに不明。内・外面ともにナデによる調整が施される。底部周辺には丸棒状工具による調整も確認される。また，底部裏面には葉脈の痕跡がある。胎土は砂質の割合が多く，剥落しやすい。底径は7.7cm。

53は器種・部位ともに不明。内・外面はナデによる調整が施される。外面はナデよりも，むしろミガキに近い。内面・底部周辺には指圧調整が確認される。底部裏面は繊維痕が認められる。底径は

7.4cm。

54は斜行した沈線を有する壷形土器。沈線よりむしろ櫛描き文といえる。計測値は底径7.0cm，胴部最大径10.6cm，現存部高さ8.0cmである。頚部には赤色塗彩が確認される。内・外面ともにナデによる調整が施されているが，内面・底部付近に指圧痕も認められる。特に内面には手ずくねの跡が目立つ。粘土紐接合部は内面に粘土紐接合痕が認められることから，内傾接合である。

表採資料①　第6図（55）

55は深鉢形土器。内・外面ともに貝殻条痕による調整が施される。外面にはナデによる調整が施される。粘土接合部は内傾接合である。内面に屈曲部が残っていることから，部位は胴部下部にかけてのものであろう。胎土は砂質の割合が多く，土器表面は崩れやすい。胎土は異なるが，地文は轟B式土器に類似している。

表採資料②　第7図（56・57）

56は深鉢形土器。部位は胴部上部から口縁部。口縁部は外反する。横走隆帯が施される。隆帯直下には「ハの字形」に斜行する隆帯が確認される。横走隆帯はヘラ状工具・斜行隆帯は貝殻による刻みが施される。口唇部は平坦に作られ，先細りしない。斜行する隆帯は山形文になる可能性が高い。内・外面ともにナデによる調整が施されている。胎土は砂質の割合が高いため，剥落しやすい。また粘土紐接合部で割れているため，内傾接合であることがわかる。

57は深鉢形土器。横走する隆帯が施される。57は口縁部付近で内湾する。隆帯は指圧調整による刻みが施される。調整は内・外面ともナデ。内面には一部ヘラ状工具による調整が確認される。また口唇部もナデによって調整される。

［註］

註1　例えば報文中図版36図の439の土器に類似する。

註2　佐賀県立名護屋城博物館の廣瀬雄一氏のご教示による。

註3　報文中の越高尾崎式土器第六類に類似した資料がある（坂田　1979）。

註4　報文中図版21図154などが挙げられる。

［引用・参考文献］

有川町教育委員会1996『頭ケ島白浜遺跡』（有川町文化財調査報告書第1集）有川町教育委員会

国立晋州博物館統營郡1993『煙臺島Ⅰ』

小原　哲1985「韓国隆起文土器の研究」『伽倻通信－新石器時代特集－』第13・14合輯号

坂田邦洋1979『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』（別府大学考古学研究室第三冊）

田中聡一1997「韓国新石器時代の隆起文土器について」『先史学・考古学論究Ⅱ　熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集』龍田考古会

廣瀬雄一1985「櫛目文土器前期の研究　―韓國南岸地域における編年を中心として―」『伽倻通信　―新石器時代特集―』第13・14合輯号

No.	器種	区	部位						文様					文様方向			調整		胎土（含有物）	粘土紐			色調		焼成	備考
			口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	不明	隆起文	沈線文	刺突文	その他	不明	横走	斜行	垂下	外面	内面		内傾	外傾	不明	外面	内面		
1	Ⅰ	3	—	—	—	—			○					○			C	C	6.7	○			b	b	良好	3.1個／cmの割合
2	Ⅰ	3	—	—	—	—				○				○	○		A.B	A.B	2.6	○			b	b	良好	1.5個／cmの割合
3	Ⅱ	3	—	—	—							○		○	○		C	C	2.3.5.7	○			a	a	良好	
4	Ⅰ	3	—	—								○		○	○		B.C	B.C	2.3.6.7	○			b	b	良好	
5	Ⅱ	3								○					○		A	A.B	3.5.7	○			f	f	良好	2.3個／cmの割合
6	Ⅴ	3						—					○				A	A	6.7	○			b	b	良好	
7	Ⅱ	3	—	—	—							○		○			C	C	2.3.5.7			○	d	d	良好	
8	Ⅱ	3	—	—								○		○	○		C	C	3.6.7			○	d	d	良好	口唇部刻み・1.4個／cm
9	Ⅱ	3						—		○					○		A	A	2.3.5.7			○	b	e	良好	1.4個／cmの割合
10	Ⅴ	3						—	○					○			A	A.B	1.4.5.7	○			i	i	良好	赤色顔料
11	Ⅴ	3						—		○					○		A	A	5.7	○			d	d	良好	
12	Ⅱ	3	—	—								○			○		C	C	2.6.7			○	e	e	良好	口唇部刻み・3.6個／cm
13	Ⅴ	3						—			○						A	A	2.3.6			○	d	d	良好	
14	Ⅴ	3						—		○					○		A	A	2.7			○	b	b	良好	1.0個／cmの割合
15	Ⅴ	3						—			○			○			A	A	2.3.6.7	○			d	d	良好	4.2個／cmの割合
16	Ⅴ	3						—		○				○	○		A	A	2.6.7	○			d	d	良好	
17	Ⅴ	3						—	○	○					○		A	A	2.3.7	○			f	f	良好	穿孔アリ
18	Ⅴ	3					—					○					C	A	2.3.5.7			○	a	c	良好	
19	Ⅴ	4				—						○			○		B.C	B.C	2.3.5.7			○	d	d	良好	
20	Ⅴ	4						—	○					○			A	A	5.7			○	f	f	良好	
21	Ⅴ	4						—		○					○		A	A.B	1.2.5.7			○	e	e	良好	
22	Ⅴ	3				—			○						○		A	A	4.5.7			○	c	c	良好	

第2表　第3・4調査区出土土器組成表

器種
- Ⅰ．深鉢形土器
- Ⅱ．深鉢あるいは鉢形土器
- Ⅲ．鉢形土器
- Ⅳ．壷
- Ⅴ．不明

胎土（含有物）
1．石英
2．角閃石
3．絹雲母
4．貝殻片
5．砂粒
6．細砂粒
7．小礫
8．ガラス光沢を有する鉱物

色調
- a．黒褐色
- b．暗褐色
- c．褐色
- d．明褐色
- e．暗赤褐色
- f．赤褐色
- g．明赤褐色
- h．橙色
- i．黄橙色

調整
- A．ナデ
- B．指圧痕
- C．貝殻条痕＋ナデ
- D．貝殻条痕
- E．ヘラによる痕跡を残すもの

※砂粒と細砂粒の区別はφ0.5㎜以下のものを細砂粒とした。

No.	器種	区	部位						文様					文様方向			調整		胎土（含有物）	粘土紐			色調		焼成	備考
			口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	不明	隆起文	沈線文	刺突文	その他	不明	横走	斜行	垂下	外面	内面		内傾	外傾	不明	外面	内面		
1	Ⅱ	5	—	—				—					○				A	A	1.2.5			○	e	f	良好	
2	Ⅱ	5	—	—									○				A	A	1.2.4.5			○	b	f	良好	口唇部に刻みアリ
3	Ⅰ	5	—	—	—	—					○						A.C	A	1.4.5.7	○			e	e	良好	1.6個／cmの割合
4	Ⅱ	5	—	—									○				A.B	A.B	1.5.7	○			e	e	良好	
5	Ⅱ	5	—	—					○					○			A	A	1.4.5.7	○			i	i	良好	1.0個／cmの割合
6	Ⅱ	5	—	—					○		○						A	A	2.5			○	b	b	良好	
7	Ⅱ	5	—	—					○						○		A	A		○			b	a	良好	2.2個／cmの割合
8	Ⅴ	5				—			○					○	○		A	A.B	2.4.5	○			d	d	良好	文様の組み合わせ
9	Ⅴ	5				—			○						○		A	A	2.4.5.7	○			e	a	良好	Ⅱの可能性大
10	Ⅴ	5						—	○						○		A	A.B	1.2.4.5.7			○	c	d	良好	
11	Ⅴ	5						—	○						○		A	A	2.4.6.7	○			f	f	良好	1.5個／cmの割合・Ⅱの可能性大
12	Ⅴ	5						—	○						○		A	A	2.5.8			○	b	b	良好	Ⅱの可能性大
13	Ⅴ	5						—	○						○		A	A	2.5.7			○	a	a	良好	Ⅱの可能性大
14	Ⅱ	5				—			○						○		A	A	2.4.5	○			e	e	良好	
15	Ⅱ	5				—			○					○			A.B	A	2.4.5.7	○			b	b	良好	ススが付着
16	Ⅱ	5				—			○					○			A	A.B	1.2.4.5.7	○			d	a	良好	
17	Ⅴ	5						—	○					○			A	A.B	4.5.8			○	e	e	良好	Ⅱの可能性大
18	Ⅴ	5						—	○					○			A	A.B	1.2.4.5.7	○			b	a/b	良好	0.8個／cmの割合・Ⅱの可能性大
19	Ⅴ	5						—	○					○			A	A	1.2.4.5.7			○	e	f	良好	Ⅱの可能性大
20	Ⅱ	5				—			○					○			A	A	2.4.5.7	○			d	d	良好	0.9個／cmの割合
21	Ⅴ	5						—	○					○			A	A	1.3.5			○	d	d	ﾔﾔ良	2.3個／cmの割合・胎土は砂質
22	Ⅴ	5						—	○					○			A	A	1.4.5.7			○	h	e	ﾔﾔ良	1.9個／cmの割合
23	Ⅱ	5				—			○					○	○		A	A	3.4.5.7	○			d	d	良好	
24	Ⅴ	5						—	○					○			A	A	2.4.5.7			○	e	e	良好	
25	Ⅴ	5						—	○					○			A	A	2.4.5.7			○	e	f	良好	
26	Ⅴ	5						—	○						○		A.B	A.B	1.2.4.5	○			e	a	良好	1.1個／cmの割合・Ⅱの可能性大
27	Ⅴ	5						—	○						○		A	A	5			○	b	b	良好	Ⅱの可能性大
28	Ⅴ	5						—	○						○		A	A.B	1.4.5	○			i	i	良好	2.9個／cmの割合・赤色顔料
29	Ⅴ	5						—	○					○	○		A	A	2.5.8			○	e	f	良好	
30	Ⅴ	5					—						○				A	A	1.4.5			○	i	i	ﾔﾔ良	底部裏面に葉脈痕
31	Ⅴ	5					—						○				A	A	1.2.4.5.7			○	c	c	良好	
32	Ⅵ	5			—	—	—			○					○		A.B	A	2.5.7	○			f	f	良好	頸部に赤色顔料

第3表　第5調査区出土土器組成表

No.	器種	区	部位						文様					文様方向			調整		胎土（含有物）	粘土紐			色調		焼成	備考
			口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	不明	隆起文	沈線文	刺突文	その他	不明	横走	斜行	垂下	外面	内面		内傾	外傾	不明	外面	内面		
1	Ⅰ					—						○		○	○		C	D	1.2.4.5	○			e	e	良好	表採
1	Ⅰ		—	—	—	—			○					○	○		A	A	1.4.5.7	○			b	b	良好	表採　横走…0.9個／cm 斜行…1.2個／cm
2	Ⅱ		—	—					○					○			A	A	4.5.7	○			f	f	良好	表採

第4表　表採土器組成表

器種
- Ⅰ．深鉢形土器
- Ⅱ．深鉢あるいは鉢形土器
- Ⅲ．鉢形土器
- Ⅳ．壷
- Ⅴ．不明

胎土（含有物）
- 1．石英
- 2．角閃石
- 3．絹雲母
- 4．貝殻片
- 5．砂粒
- 6．細砂粒
- 7．小礫
- 8．ガラス光沢を有する鉱物

色調
- a．黒褐色
- b．暗褐色
- c．褐色
- d．明褐色
- e．暗赤褐色
- f．赤褐色
- g．明赤褐色
- h．橙色
- i．黄橙色

調整
- A．ナデ
- B．指圧痕
- C．貝殻条痕＋ナデ
- D．貝殻条痕
- E．ヘラによる痕跡を残すもの

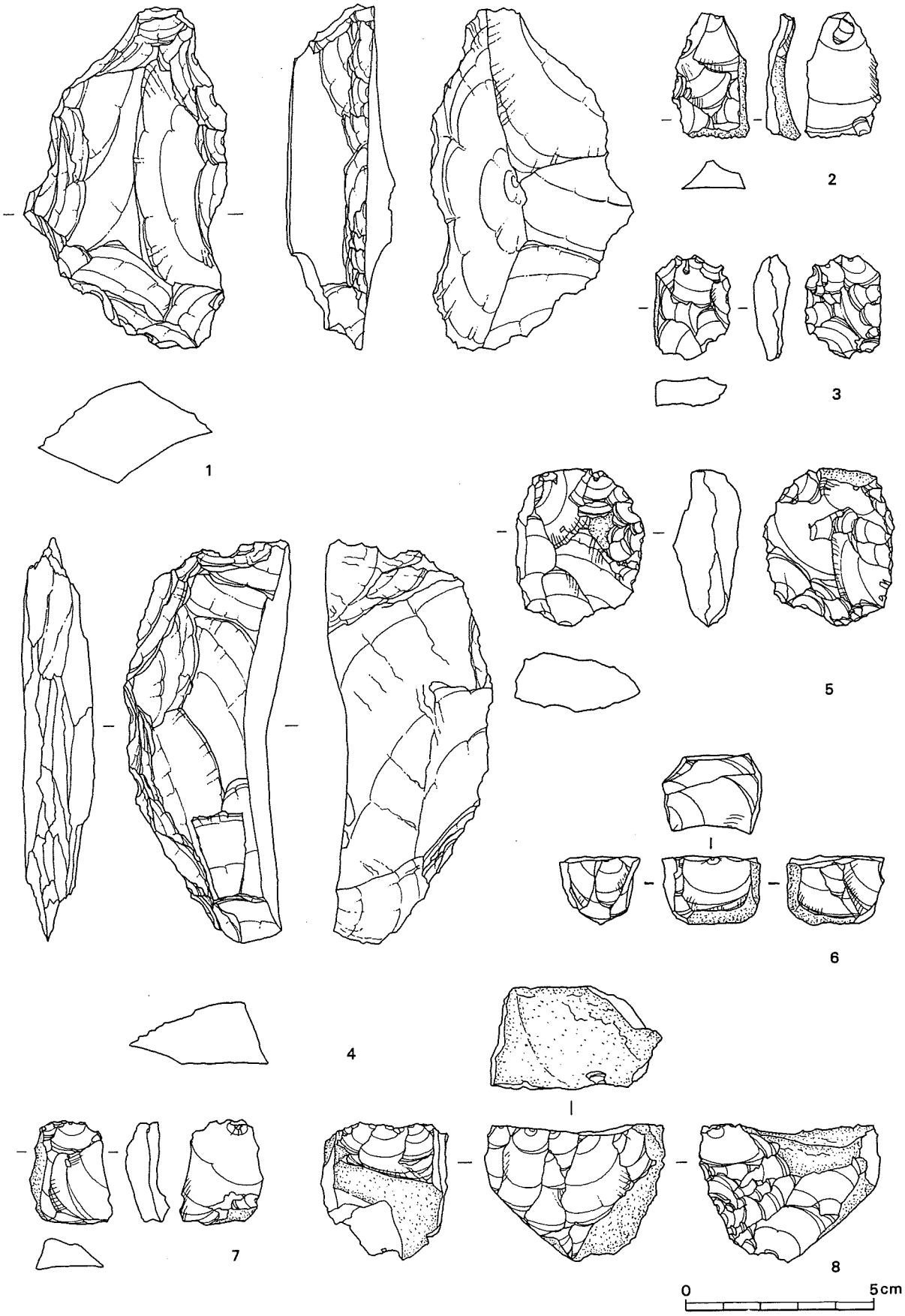
※砂粒と細砂粒の区別はφ0.5mm以下のものを細砂粒とした。

（2）石器（第8・9図1～9）

A地点第3トレンチを中心に出土している。石材は黒曜石が多いが、大形のスクレイパーには、対州層群を形成する頁岩が使用される。

1・4は頁岩製の大形スクレイパーで、1は厚みのある素材を使用し、刃部の角度が急傾斜である。特に図左側に加工が集中しており、ステップフレイキング状の剥離で刃部を形成することに特徴をもつ。4は頁岩の薄い剥片を使用し、1と同様一側辺を中心に加工が集中する。1とは厚みにこそ違いはあるものの、刃部を形成する階段状剥離において共通するものがあり、この時期のスクレイパーに共通する加工と考えられる。2・7は黒曜石製の剥片で、一側辺と底辺に自然面を残し、小さな平坦打面を持つことで共通する。6のような石核から剥離されたものであろう。3・5は一側辺に自然面を残して直線状に仕上げ、反対側に半円状に粗い加工を施している。この部分を使用したサイドスクレイパーであろうか。縁辺の加工は一つ一つが打点を奥に入れ、粗い鋸歯状の加工となっている。2点とも同様なタイプとして取り扱える資料であろう。

6・8は角礫の黒曜石を使用した石核で、素材は腰岳の黒曜石と考えられる。6は小形の角礫を剥離し終わった最終段階のもので、上面の2条の剥離痕を利用して方形状の素材周辺に剥離を繰り返している。特に中央の剥離面から剥離された剥片は上面の剥離面を打点とした平坦打面をもち、表面は自然面に覆われた小形の剥片が剥離されたと推測される。剥離された剥片は非常に小さいものであり、石器の素材と成り得たものかわからない。この様な小形の石核として縄文晩期の十郎川剥片剥離を想起させるが、形状が方形状を呈し、剥離そのものが整然としている点で相違する。8は大形の角礫を使用している。上面観は方形を呈し、一方の小口に直角に剥離面を形成する。打面調整は全く行われず、自然打面である。正面の剥離面は整然としており、薄い縦長剥片が剥離されているが、いずれも自然面を残した剥片が剥離されたものと考えられる。9は、砂岩製の磨石で、表裏ともに研磨痕が観察でき、周囲は打痕が残されていることから、叩いて加工する行為と擦り付けて整形する道具であったことが考えられよう。



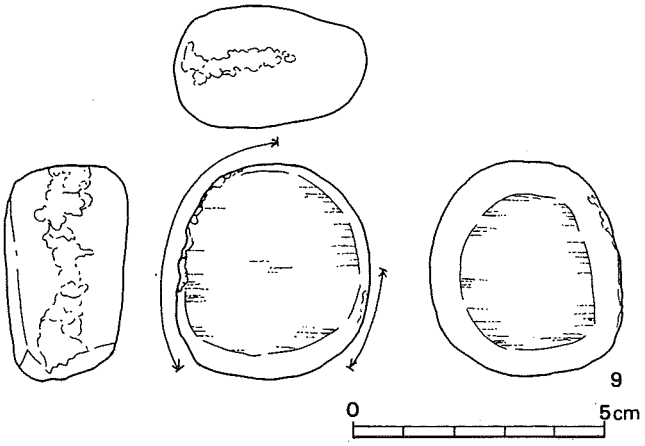
第８図　越高浜遺跡出石器①（S=2/3）

第Ⅳ章　総　括

1．隆起文土器について(註1)

隆起文土器とは文様に隆線・隆帯が施される土器をさす。また，研究者によって異なるが，隆起文土器は韓国新石器時代早期（前期）に位置づけすることができる。

隆起文土器の調査・研究は古く，様々な問題点が提起されてきた。以下代表的な調査経歴を簡単にまとめた。



第９図　越高浜遺跡出土石器②（S=2/3）

1929…東三洞貝塚・瀛仙洞貝塚調査（横山將三郎・及川民次郎）

東三洞貝塚下層より隆起文土器を確認。

1932…東三洞貝塚調査（及川民次郎・大曲美太郎）

1933…瀛仙洞貝塚調査（有光教一）

新石器時代・鉄器時代の文化層を確認。現在，遺跡そのものは消滅している。新石器時代の主体遺物は櫛目文土器で，文様に刺突文・押引文・格子文などをもつ。その他沈線文様をもつ隆起文土器・櫛目文土器も確認される。櫛目文土器編年において瀛仙洞貝塚は南部地域前期のメルクマールとなる遺跡。

1964…東三洞貝塚調査（A．モア，L・L・サンプル）

隆起文土器は最下層に純粋な層位で存在する＝「頭島期」と主張。また調査を担当したA．モア，L・L・サンプルは東三洞貝塚を５期区分している。

1966…新岩里遺跡試掘（ソウル大学校博物館・任考宰）

1969…東三洞貝塚全面調査（国立中央博物館）

1974…新岩里遺跡全面調査（国立中央博物館）

1978…上老大島貝塚発掘（東亜大学校・延世大学校物館）

東亜大学校と延世大学校で異なる地点を調査している。東亜大学校の調査で層位は５層・３つの文化層を確認している。２層以下すべての層から隆起文土器の出土を確認している。

延世大学校では層位を10層，文化層は４層確認している。隆起文土器はⅢ層以下の層すべてから櫛目文土器・丹塗研磨土器・打製石器・骨角器などと共伴して出土している。

1981…鰲山里遺跡調査（ソウル大学博物館）

1988・煙臺島調査（国立晋州博物館）

1989・凡方貝塚調査（釜山広域市立博物館）

1993・清道梧津里岩陰遺跡調査（釜山大学校博物館）

隆起文土器を出土する遺跡は他にもあるが，編年上の位置づけは明確ではない。十分な資料が不足

していることが現状である。

ところで日本における櫛目文土器は櫛目文系土器も含めて10遺跡程度と少ない。長崎県が大半を占めており，その中でも特に対馬からの出土は４遺跡と目立つ。櫛目文土器は出土地の絶対数が少ないため，多くの問題が生じている。この問題の中の１つが隆起文土器の起源についてであり，以下の説が出されている。

・韓国隆起文土器と縄文時代草創期の隆起文土器を関連させた説
・前期轟式土器の伝播説
・朝鮮半島東北地域からの南下説
・前期轟式土器とは並行した関係ではあるが，伝播は否定した説

かつて廣瀬雄一は前期轟式（轟Ｂ）土器の北上説を提唱していたが，最近は隆起文土器は前期轟式土器の北上という一方通行的なものではなく，鄭澄元・宮本一夫らの主張している韓国慶南地方の伝播が主要な流れであることを認めている。

いずれにしても隆起文土器の起源については今後の研究の進展に待つ部分が大きいが，今回の越高浜遺跡出土の土器や，その他対馬から出土した土器は，器面調整技法において韓国慶南地方の隆起文土器の技法（貝殻条痕＋ナデ，ナデのみ）と轟Ｂ式土器の技法（貝殻条痕）が共存している。このことから対馬は位置的に両地方の技法が接する地点であるといえよう。

［註］

註１　この節については，佐賀県立名護屋城博物館の廣瀬雄一氏の全面的な校訂をうけた。記してご指導に感謝したい。

［引用・参考文献］

［引用・参考文献］
坂田邦洋1978『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷出版事業部
坂田邦洋1979『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』広雅堂
廣瀬雄一1985「韓国隆起文土器論－編年を中心として－」『異貌』第11号　共同体研究会
島津義昭1987「日韓の文物交流」『季刊考古学－アジアのなかの縄文文化－』第38号　雄山閣
田中聡一1997「韓国新石器時代の隆起文土器について」『先史学・考古学論究Ⅱ』熊本大学文学部考古学研究室創

２．越高浜遺跡出土の石器について

今回出土した石器は少数であったが、掻器についてはこの時期の特徴として捉えられる。また石核についても縄文晩期の石核に類似した小形の石核が存在するのがその特徴であろう。前回坂田が調査した越高遺跡（今回調査のＢ地点）の調査の折にはかなりの石器が出土している。また坂田調査分の越高浜遺跡（今回調査の第Ａ地点）でも石器が出土しているためこれと併せて今回の調査地点における石器群を考察してみたい。

坂田が調査した越高遺跡出土石器は、黒曜石製石鏃・頁岩製鋸歯鏃・石斧・石錐・掻器・磨石・石

錘・石槍・石核等多種にわたる。石材はほとんど頁岩からなるが、腰岳産、壱岐産、伊万里産の黒曜石を素材としたものも出土するという（坂田1978）。頁岩製鋸歯鏃や石槍については、田平町つぐめの鼻遺跡出土の石銛との対比がなされているが、縄文時代早期終末から前期のつぐめの鼻遺跡出土の銛先は、本遺跡のものとは形態的に相違しており技術的な面でも共通性は認められないものと考えられる。ただし、両者とも海に面した遺跡であることから漁撈的な色彩が強い石器であろうことは予想され、対馬櫛目文土器の石器文化の性格の一端を表しているものと思われる。

また、つぐめの鼻遺跡では石銛の他に石匙の出土も顕著であるが、越高遺跡では石匙の出土は現在の段階では出土していない。先に触れた越高遺跡出土の掻器はA地点の掻器と同じ頁岩を使用しており、刃部が階段状の粗い刃部にその特徴をもつことは先にも述べた。

また、越高浜遺跡でも同様な掻器が出土するなど、現在においては掻器が主体的利器として使用されたことが考えられる。朝鮮半島における櫛目文文化については研究もかなり進展してきてはいるが、石器研究については筆者の管見の限りにおいては、その性格を把握することはできない状況にある。この状況は九州の縄文前期の石器についても同様であり、土器をも含めた相互の研究が今後望まれるところである。

［引用・参考文献］

坂田邦洋1978『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷出版事業部

第Ⅴ章　まとめ－越高浜遺跡出土土器を中心として－

今回の調査では調査範囲内が限定されたが，出土土器においては良好な資料が得られた。器種は深鉢・鉢を主体とした櫛目文土器が出土遺物の半数以上を占めた。しかし層位に関しては明瞭な分層ができなかったため，出土土器の編年までには至らなかった。

したがって，本章では出土遺物の分類・文様帯の構成を観察することで，越高浜遺跡における土器・石器を簡単に総括したい。

今回紹介した土器は57点である。器種の大半は深鉢が占め，これに鉢形土器・壷形土器が続く。また，器種の判断がつかないものは「深鉢あるいは鉢形土器」とした。深鉢形土器の可能性が高くても小破片のため明確に断定できないものは，「深鉢あるいは鉢形土器」という名称を用いた。

土器文様は大きく，隆起文・櫛目文・刺突文の３種類に分類できた。特に隆起文・櫛目文は文様帯で細分が可能である。

隆起文は隆線・隆帯の２種に分けることができる。隆起文に調整がないものを隆線，調整をもつものを隆帯としている。隆帯の調整は大きく３分類できる。指圧により成形されるもの，ヘラ状工具によって形成されるもの，丸棒状工具によって形成されるものが分類過程で確認された。しかし丸棒状工具による調整でも工具の大小がそれぞれ異なるものもある。

櫛目文は格子目・沈線・平行沈線・櫛描きの４分類ができる。沈線は基本的に単体のものと考えた。沈線が複数のものを平行沈線，数本単位で掻くように文様を付けたものを櫛描きとした。また，格子目は左右対称の平行沈線が互いに交わったものと考えた。

刺突文は丸棒状工具などによって刺突が施されたものとした。出土遺物では口縁部に列点文を有する深鉢形土器，小破片ではあるが一定方向から全面に施されたものの２種類が確認された。

文様方向は横走・斜行するものに分かれるが，垂下に近いものも斜行するものに含めた。また，文様方向の組み合わせもあり，横走＋斜行・斜行＋斜行・斜行＋横走も確認されている。当然，文様方向そのものも隆線・隆帯・刺突などで構成されていることは言うまでもない。

土器の表面調整はナデ・指圧痕・ヘラ・貝殻条痕・貝殻条痕＋ナデが認められ，ナデ・貝殻条痕＋ナデの出土点数が確認された。貝殻条痕＋ナデによる調整は，ナデが強く施され条痕がかすかに見えるもの，ナデが弱く条痕が目立つものに分かれる。後者は調整というよりはむしろ地文に近いものであるが，今回は調整の部類に含めた。

以上が簡単ではあるが出土土器の特徴である。特に文様構成に関しては，単体構成ではなく複数構成が認められたことは大きい。今回の調査で確認された文様構成は少ないが，この他に様々なバリエーションの組み合わせの可能性は高い。

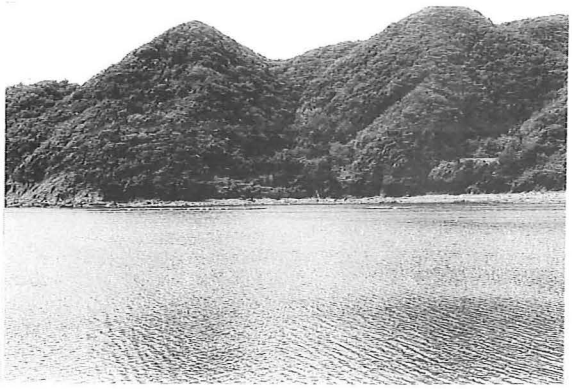
資料作成においての遺物の細分化はできなかった。土器片が小さいことも理由の１つにあげられるが，最大の理由は時間的制限があったことである。これは筆者の怠惰から起こったものであり，今後機会があれば，別紙で報告をしたい。

〔引用・参考文献〕

小原　哲1985「韓国隆起文土器の研究」『伽倻通信―新石器時代特集―』第13・14合輯号廣瀬雄一1985「櫛目文土器前期の研究―韓国南海岸地域における編年を中心として―」『異貌』第11号

田中聡一1997「韓国新石器時代の隆起文土器について」『先史学・考古学論究Ⅱ』熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集

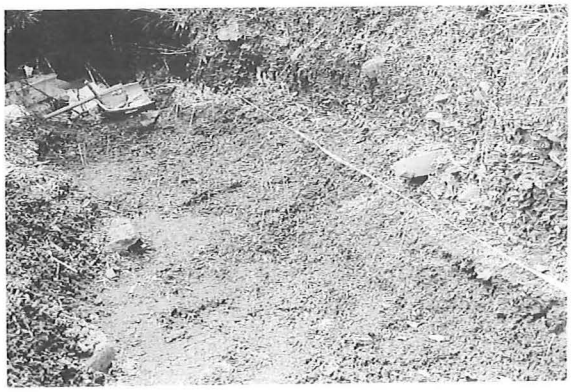
図　　版



①

②

③



④

⑤

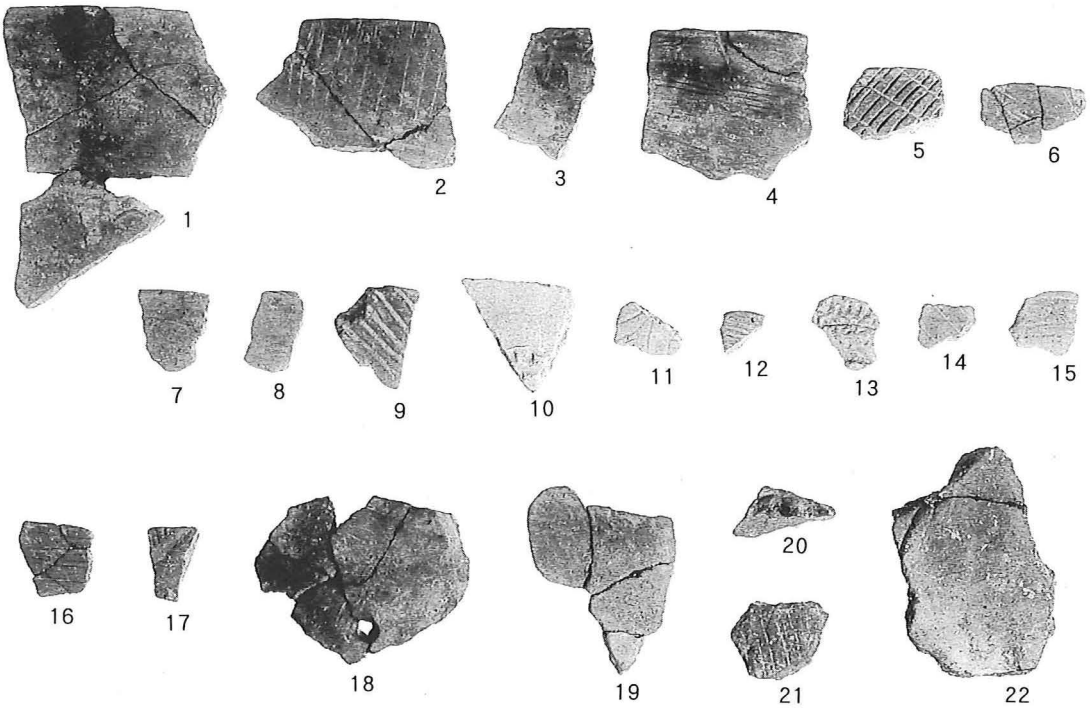
⑥

⑦

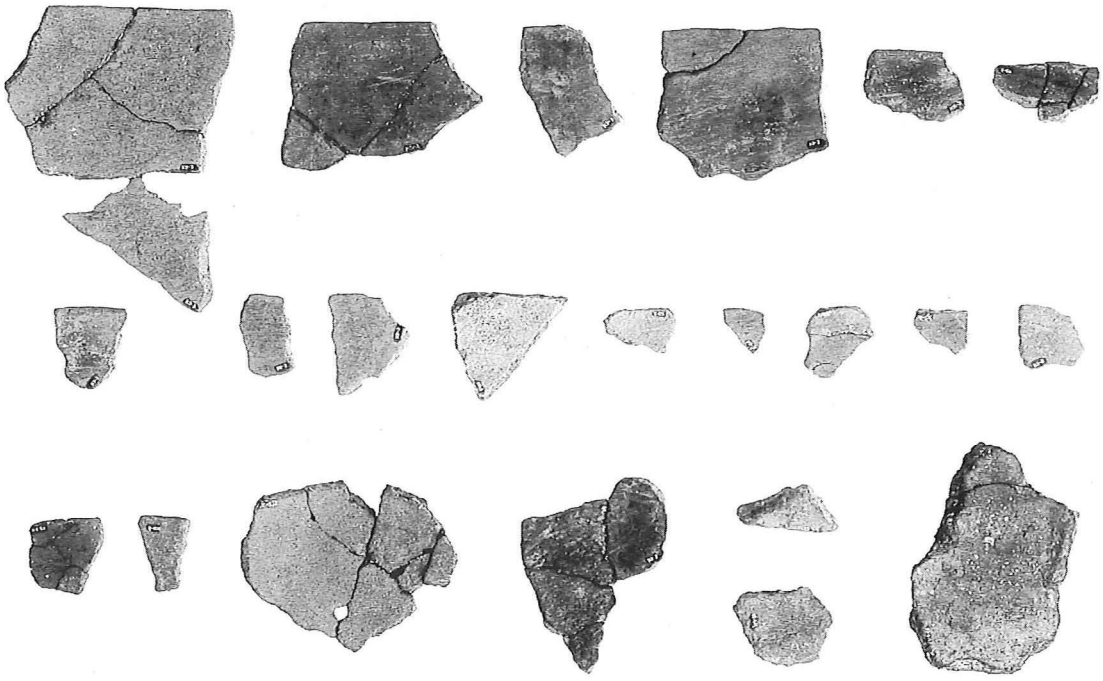
① 遺跡遠景（中央の谷部がＡ地点，それより右側がＢ地点）矢印の下
② 満潮時の遺跡周辺
③ Ｂ地点調査風景
④ Ａ地点第３トレンチ
⑤ Ｂ地点壁面中の土器
⑥ Ｂ地点崖面
⑦ 砂礫層中の検出の土器

図版①　越高浜遺跡遠景・近景および遺物出土状況

外　面

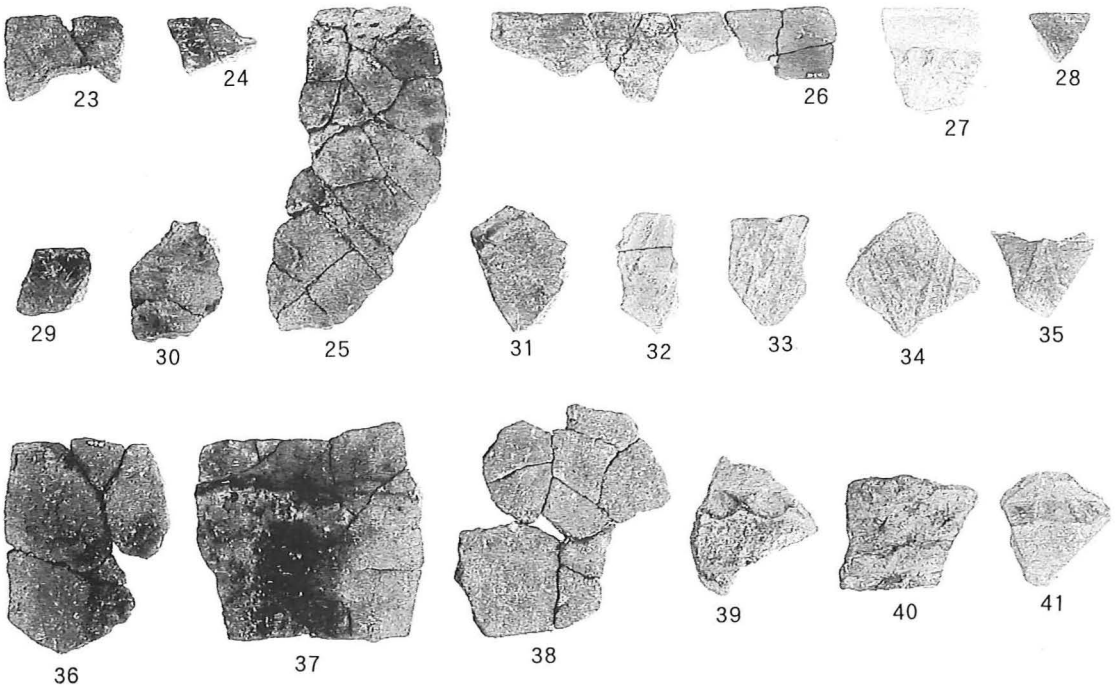


内　面

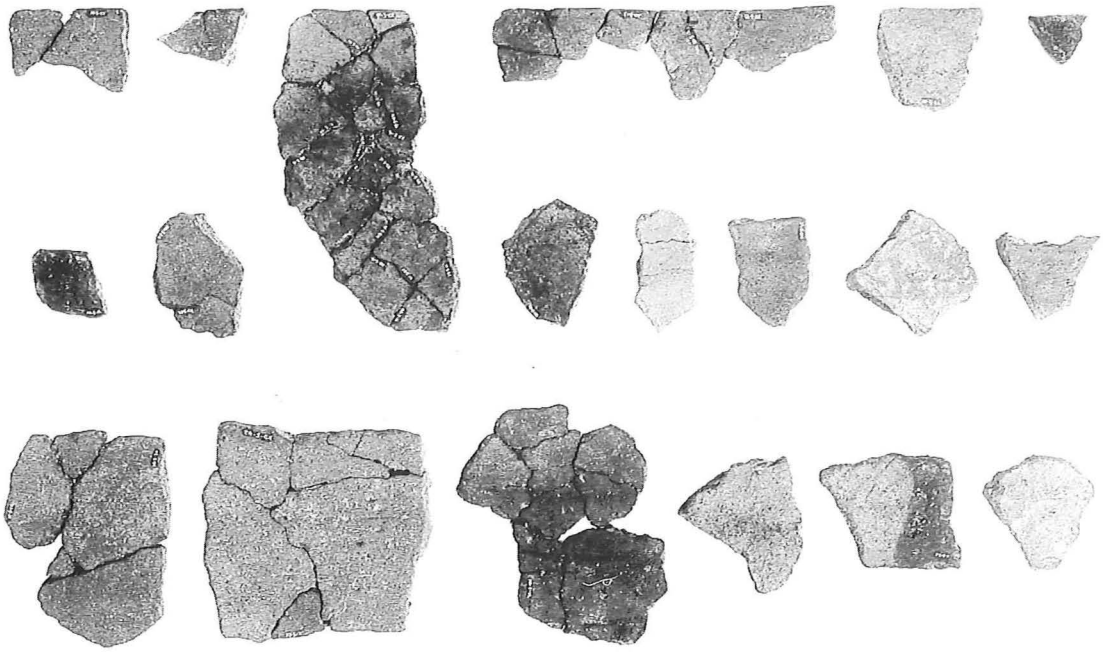


図版②　出土土器①

外　面

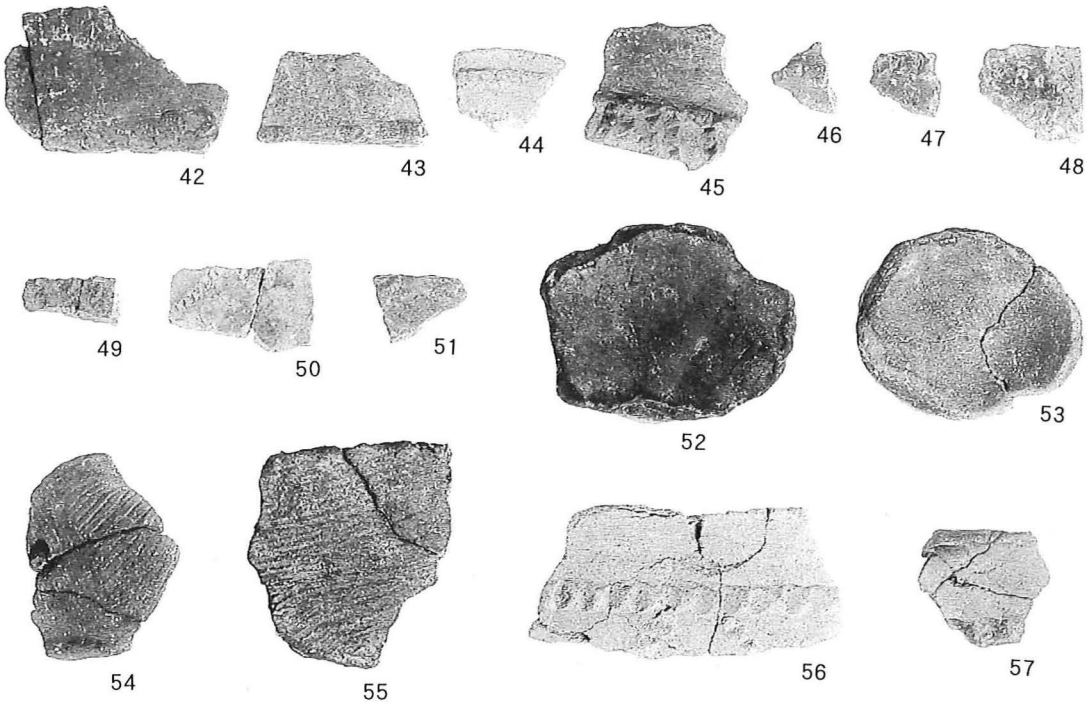


内　面

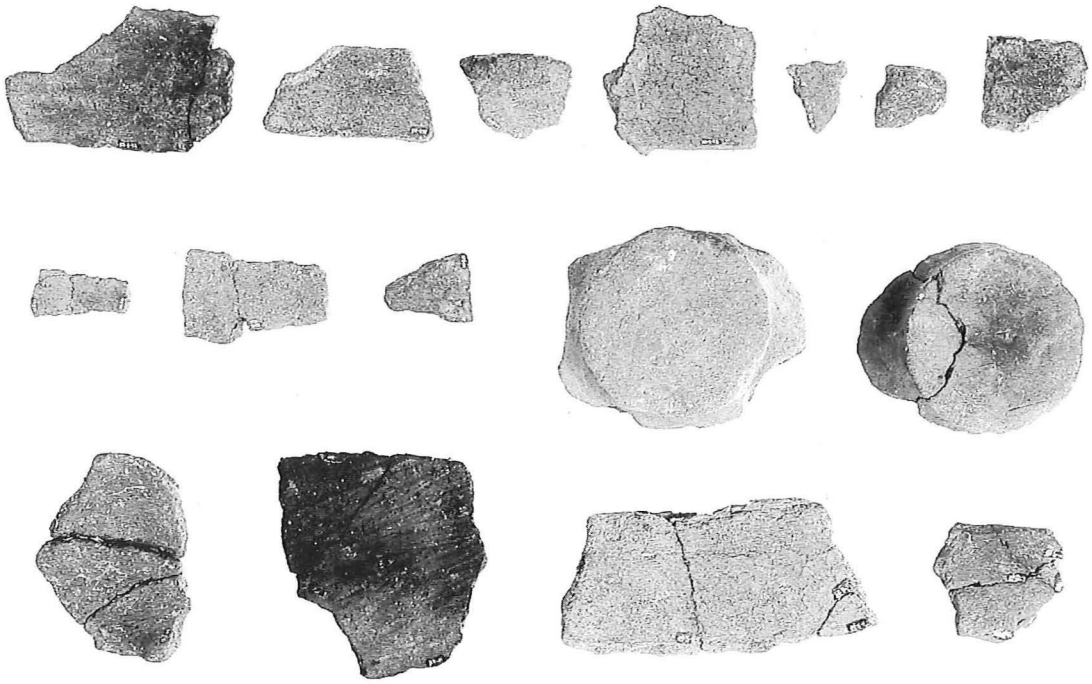


図版③　出土土器②

外　面

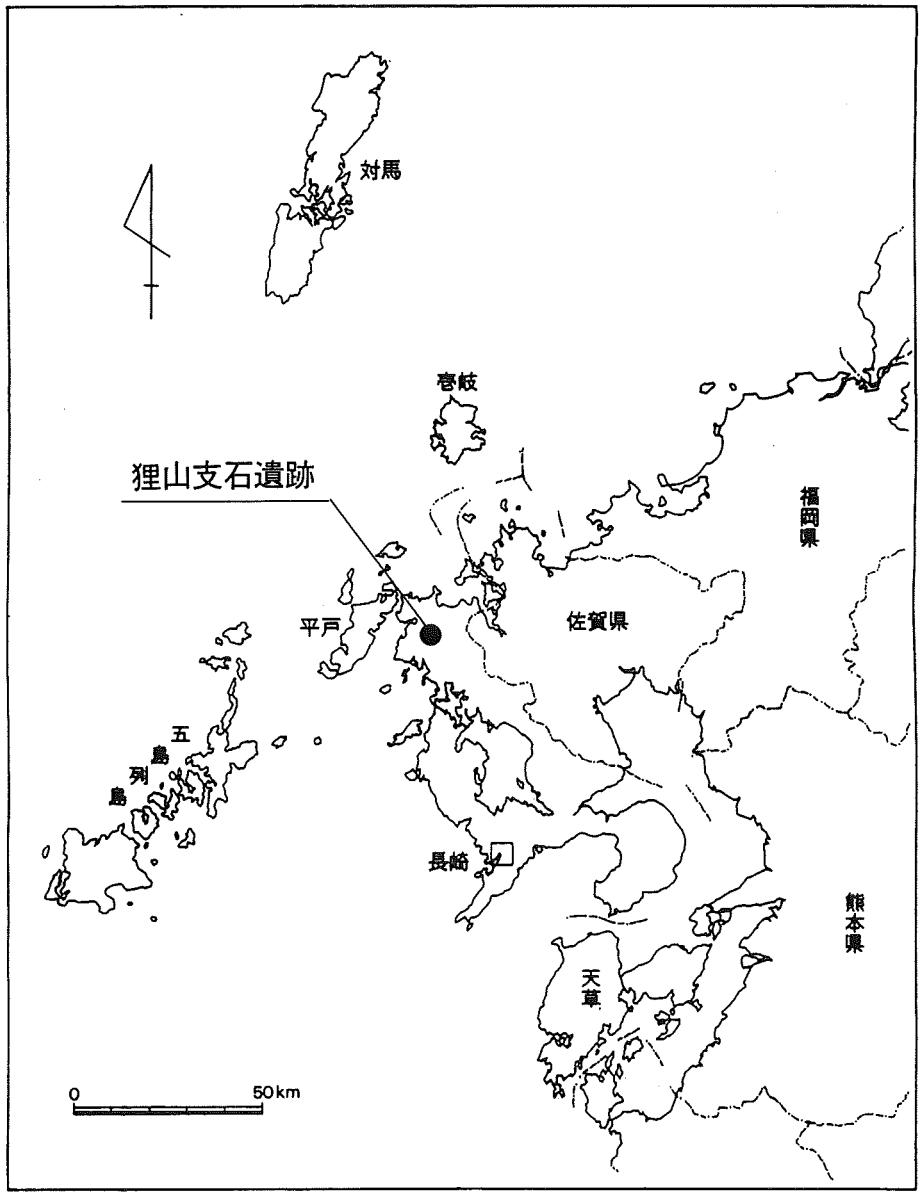


内　面



図版④　出土土器③

第Ⅲ部　狸山支石墓群周辺



例　　言

1．本報告は平成８年度に実施した長崎県北松浦郡佐々町松瀬免に所在する狸山支石墓群周辺地の主要遺跡内容確認調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり、佐々町教育委員会の協力を得て、平成８年８月26日から８月30日まで実施した。調査面積は100㎡である。

3．調査担当者及び調査協力者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	村川　逸朗
		〃	小松　　旭
調査協力	佐々町教育委員会	教育長	佐藤　健次
		社会教育主事	鴛淵　育雄

4．本書の執筆は、第Ⅰ章を小松が、それ以外を村川が行った。

5．本書の編集は村川による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 58
第Ⅱ章　調査の履歴及び経緯 …… 58
第Ⅲ章　調査概要 …… 60

挿 図 目 次

第１図　周辺遺跡地名表 …… 59
第２図　昭和32年出土遺物（鰹節形大珠） …… 60
第３図　平成８年度調査範囲位置図 …… 60
第４図　昭和32年狸山支石墓調査位置図 …… 61
第５図　昭和32年調査支石墓実測図 …… 61

第１章　地理的歴史的環境（第１図）

佐々町は，北松浦半島の中央部に位置し，町の中央部を東西に二分する形で世知原町の国見山を源とする佐々川が流れている。この川によって町内は東部と西部にほぼ二分される。東には韮岳が，西には鷲尾岳・金比羅岳等が連なり，東の佐世保市，西の鹿町町とにさえぎられている。

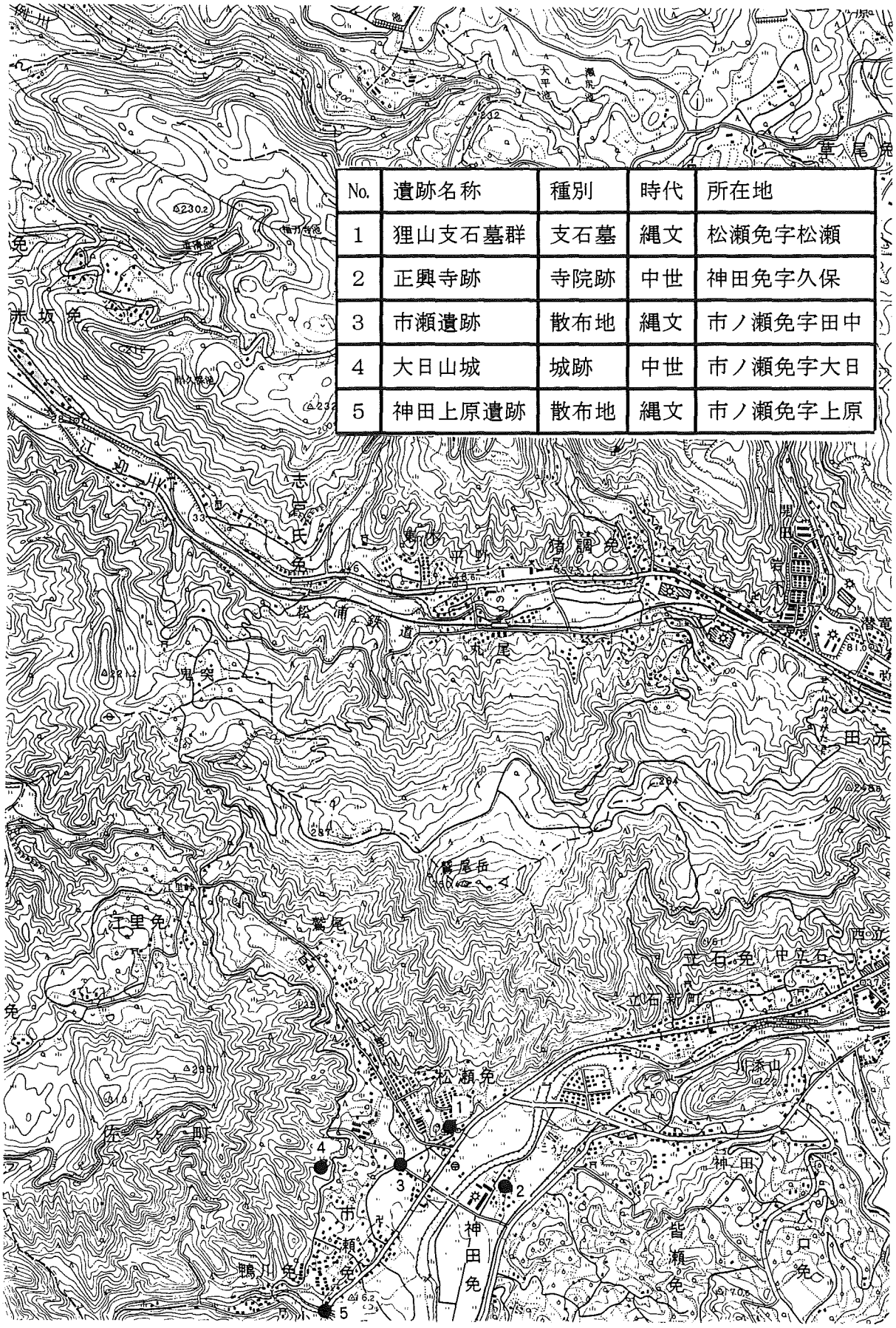
佐々川流域には水田が広がり，特にこの河口部では沖積地が発達して町内最大の水田地帯となっている。

町内には，縄文時代晩期の狸山支石墓の他，中世の山城として，東光寺山城跡，鳥屋城跡等がある。これらの山城跡は，戦国時代末期に平戸松浦氏の最前線として，相浦の宗家松浦氏と対峙していた。近世では，市の瀬免に市の瀬窯跡がある。

第２章　調査の履歴及び経緯（第４・５図）

県教育委員会では平成３年度から平成７年度までの５年間，16遺跡について重要遺跡範囲確認調査（カルテ事業）を実施し，諸開発事業との協議のための基礎資料を作成してきた。平成８年度は，韓国新石器時代の櫛目文土器が出土する縄文時代の上県町越高浜遺跡・縄文時代の墓域である佐々町狸山支石墓周辺（県指定史跡）・北有馬町原山支石墓群（国指定史跡）の三ヶ所で調査を実施し，狸山支石墓では８月26日から30日に調査を実施した。

狸山支石墓では，1957（昭和32）年２月九州産業大学森貞次郎教授によって調査されている。支石墓は７基あって，調査は５・６号支石墓について行われている。７基の支石墓は丘陵に沿ってほぼ４ｍ間隔で東西に５基あり，その西端に近接してさらに２基があった。東端の１号墓は前年に破壊され，上石だけが現存していた。地元の方の話によると，下部構造は数個の支石の下に石棺があって，棺床には小砂利が敷かれていたということである。２・７号は1945（昭和20）年頃破壊されて方形に近い粗製箱式石棺が露出していた。３・４号は上石の一部が露出していた。５号は上石のほとんどが露出していたが支石はみえなかった。６号は５号発掘の際に発見されたもので，上石はすでに失われていた。５号支石墓は長さ1.3ｍ，幅約１ｍ，厚さ20cmの上石の下に８個の支石があった。この支石及び箱式石棺の位置は上石の下の中央部でなく西北方に偏っていた。箱式石棺は長さ60cm，幅40cm，深さ40cmのほぼ方形をした粗製箱式石棺で完全な形で見つかった。石材は上石は花崗岩，支石と石棺材は安山岩と異なっており，小口石が側壁石を挟み込む不安定な構造である。６号支石墓は５号の北に接し，安山岩を使用した粗製石棺が多数の板石によって覆われていた。上石は除去されたと思われ，５個の支石が残っている。石棺の内法は長さ94cm，幅25～30cm，深さ約40cmと長方形であり，側壁は上石の重圧により内側に倒れている。石蓋は板石を三重積みにしている。石材はすべて安山岩で，側壁石が小口石に挟まれる構造である。６号の箱式石棺は日本の支石墓の下部構造としては最初の発見である。遺物は，土器が６号支石墓の石棺の中から数片出土している。これらは条痕をもつ粗製土器で，外から流れ込んできたものと思われる。また，６号支石墓の底部中央から長さ4.4cmの鰹節形大珠が発見された。石材は長崎ヒスイとよばれる白斑のある淡緑色をした蛇紋岩系である（森



No.	遺跡名称	種別	時代	所在地
1	狸山支石墓群	支石墓	縄文	松瀬免字松瀬
2	正興寺跡	寺院跡	中世	神田免字久保
3	市瀬遺跡	散布地	縄文	市ノ瀬免字田中
4	大日山城	城跡	中世	市ノ瀬免字大日
5	神田上原遺跡	散布地	縄文	市ノ瀬免字上原

第１図　　狸山支石群周辺遺跡地名表（S=1/25,000）

1969）。土器は夜臼式に属し，縄文時代の終末のものである。森氏は狸山支石墓６号支石墓がやや小型であることと箱式石棺の組み方が定型化していないことを除いて，『韓国支石墓研究』の南方式第Ⅲ類の形式に類似している。そして，側石の組み方と構造的に石囲い的要素が強いため，韓国直系のものではなく，方形に近い粗製箱式石棺よりも時期的に下るものと考えられるとしている。

［参考文献］

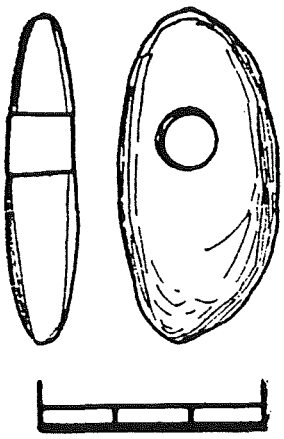
岩崎二郎1980　「北部九州における支石墓の出現と展開」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』

森貞次郎1969「６　日本における初期の支石墓」　『金載元博士回甲記念論叢』

長崎県教育委員会1997『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ

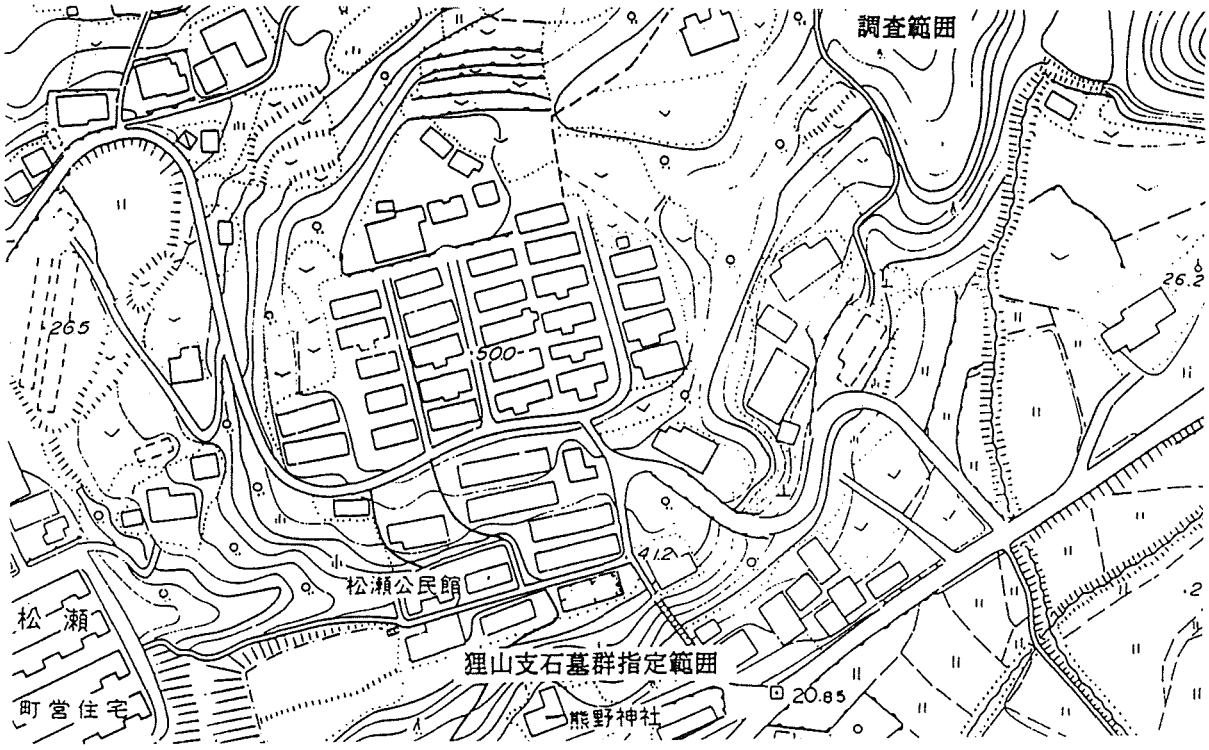
第３章　調査概要（第３図）

狸山支石墓群は，標高40ｍの小高い丘陵上に立地しているが，今次の調査地点は，狸山支石墓群から北東に約200ｍの位置である。後方には標高350ｍの鷲尾岳があり，遺跡が乗る丘陵はその裾野に位置している。調査地の現状は檜林となっている。

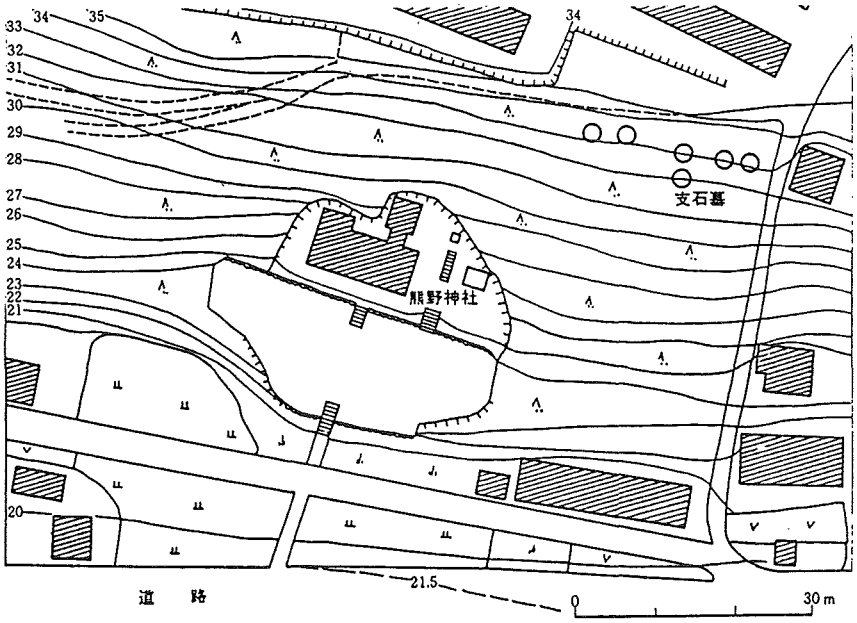


第２図　昭和32年出土遺物（鰹節形大珠）実大

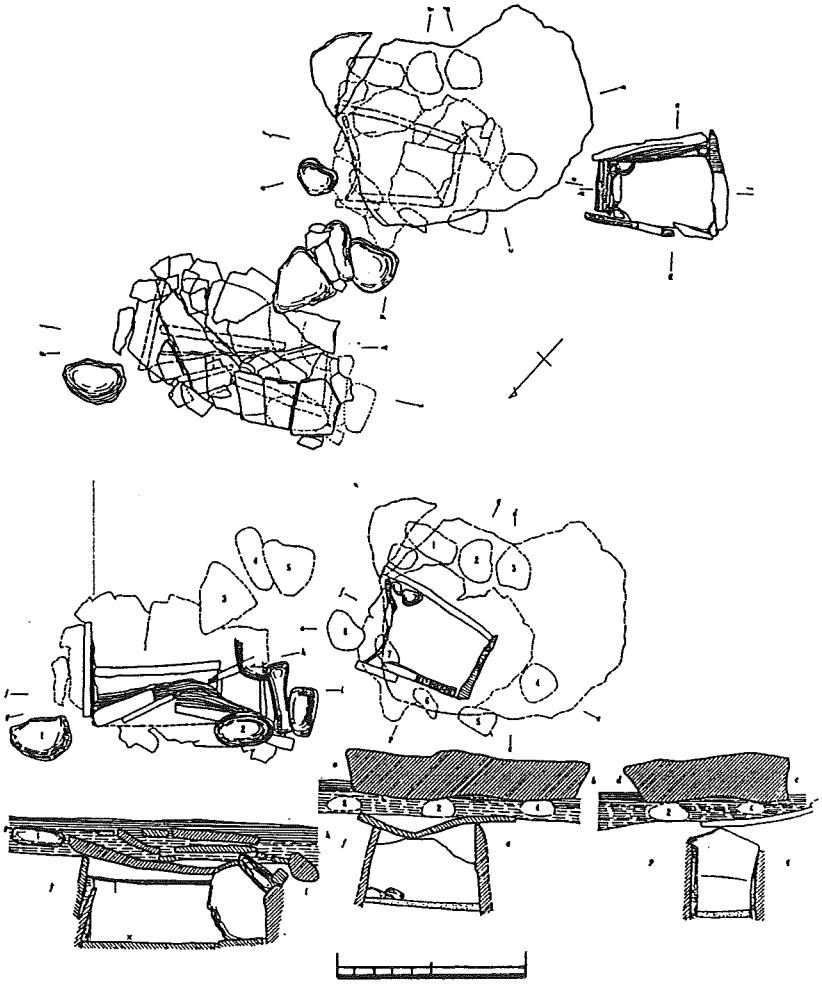
調査は支石墓の上石状の自然石が群在する場所を選び10ｍ×10ｍの調査区を設定した。厚さ15cm程の表土を剥がし，石棺等の遺構の有無と，支石墓の上石状の自然石の下部の確認を行った。出土遺物及び遺構の検出もなく，上石状の自然石の下にあったものは，自然石のみであった。その他の人為的な痕跡は認められなかった。調査状況の写真撮影及び調査区とその周辺の平板測量，そして，支石墓の上石状の自然石の実測を終えて調査を終了した。



第３図　　平成８年度調査範囲位置図（S=1/10,000）



第４図　昭和32年狸山支石墓調査位置図



第５図　昭和32年調査支石墓実測図

報　告　書　抄　録

ふりがな	けんないしゅよういせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書名	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ
副書名	
巻次	Ⅰ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第147集
編著者名	小松　旭・東　貴之・福田一志・古門雅高・村川逸朗
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-0861　長崎県長崎市江戸町2-13　　TEL　095-824-1111
発行年月日	西暦　1998年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はらやましせきぼぐん 原山支石墓群	南高来郡 北有馬町 坂上下名	372	2	32° 40′ 33″	130° 12′ 35″	19960708 ｜ 19960830	220㎡	学術調査
こしだかはまいせき 越高浜遺跡	上県郡 上県町 大字越高	445	28	34° 32′ 50″	129° 20′ 0″	19960826 ｜ 19960913	100㎡	学術調査
たぬきやましせきぼぐんしゅうへん 狸山支石墓群周辺	北松浦郡 佐々町 松瀬免	391	2	33° 15′ 35″	129° 40′ 7″	19960826 ｜ 19960831	100㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原山支石墓群	支石墓群	縄文・弥生時代	性格不明遺構	弥生土器	集石をともなう性格不明遺構（弥生後期）
越高浜遺跡	包含地	縄文前期		韓国・隆起文土器	
狸山支石墓群周辺	支石墓群	縄文晩期			

長崎県文化財調査報告書　第147集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ

平成10年3月31日

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印刷　㈱クイックプリント
長崎市樺島町8番12号